

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第25集

はる  
原 の 辻 遺 跡

原の辻遺跡発掘調査事業に係わる範囲確認調査報告書Ⅳ

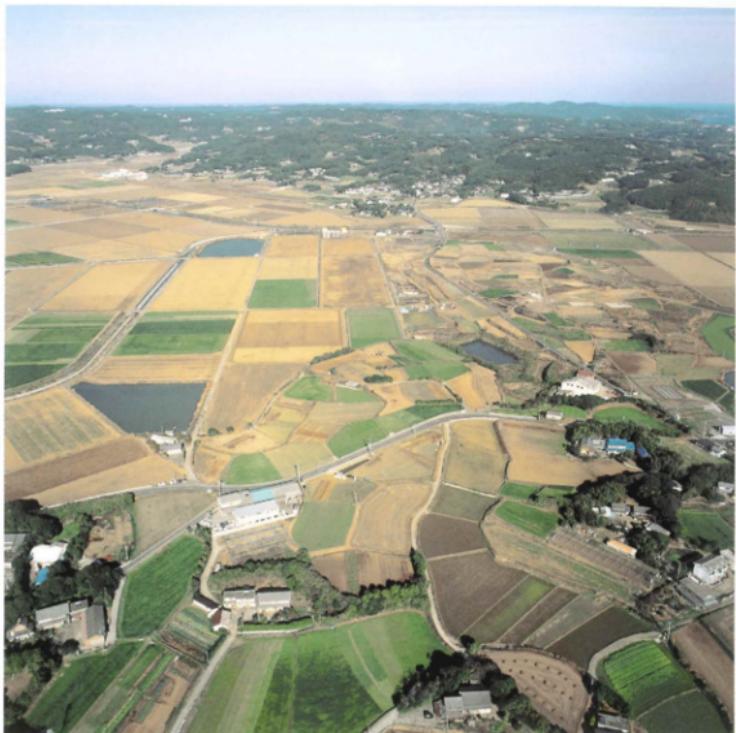
2002

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第25集

はる つじ  
**原 の 辻 遺 跡**

原の辻遺跡発掘調査事業に係わる範囲確認調査報告書Ⅳ



調査区遠景（南より）



八反地区 麦棺出土状况



八反地区 丹塗磨研壺出土状况

## 発刊にあたって

本書は、平成7年度から国庫補助を受けて実施している原の辻遺跡発掘調査事業の平成13年度の報告書です。

原の辻遺跡は、日本最古の船着き場を始め、大陸や朝鮮半島との交流を物語る数多くの遺物が出土することや、大規模な多重環濠が集落を巡ることなどから、『魏志倭人伝』に記載された一支国の王都と特定され、平成9年9月に国史跡、平成12年11月に国特別史跡の指定を受けました。弥生時代の集落遺跡としては全国で3番目ということで、その重要性が高く評価された結果だと思います。

本遺跡は、幡ヶ谷川下流域に形成された深江田原の平野に遺跡総面積約100ヘクタールという広さを誇り、計画的な発掘調査が進められ、これまでに大きな成果をあげてきました。今年度の調査は、丘陵部南側にあたる石田町原ノ久保地区・池田大原地区・菅ノ木地区と西側の芦辺町八反地区で実施しました。

石田町城の調査は、今までの調査で確認されている環濠のさらに外側に掘られた濠が何のために掘られ、どのように延びていくのか、また平成12年度の調査で確認された原ノ久保地区の石棺墓周辺の墓域の広がりを確認すること目的に調査を実施しました。そして特に後者に関しては大きな成果をあげました。

芦辺町八反地区では、これまで範囲調査で点的にしかわかつていなかった環濠の状況を明らかにすること目的に調査を実施しました。そして複数の濠を確認し丘陵西側傾斜地の状況がより詳しく明らかになりました。

このように、綿密した調査によって新しい発見もあり、当時の状況が少しずつ明らかになってきました。これからも調査は続けられますが、一地域に埋没することなく、東アジア史の視点で調査研究を行っていきたいと考えています。また、原の辻遺跡の保存・整備・活用について大まかな指針が示され、今後は地域住民の方々のご理解を得ながらよりよい方向性を模索していかなければならないとも考えています。

原の辻遺跡の調査成果が、学術資料として活用され、文化財の愛護に役立てていただければ幸いです。

平成14年3月31日

長崎県教育委員会教育長 木村道夫

## 例　　言

1. 本書は、国庫補助を受けて平成7年度から実施している原の辻遺跡発掘調査事業の平成13年度分の発掘調査報告書である。
2. 調査は、芦辺町教育委員会と石田町教育委員会の協力を得て、長崎県教育委員会が主体となって実施したものである。
3. 本書に収録した現場担当者は（ ）内に記した。また、執筆者については本文目次の項に示した。
  - ①八反地区　　（担当者 中尾篤志・藤村　誠）  
芦辺町深江鶴龜触字八反
  - ②池田大原地区　（担当者 安楽　勉・小玉友裕）  
石田町池田東触大原
  - ③萱ノ木地区　　（担当者 安楽　勉・小玉友裕）  
石田町池田東触萱ノ木
  - ④原ノ久保地区　（担当者 安楽　勉・小玉友裕）  
石田町池田東触原ノ久保
4. 本書関係の出土遺物と図面及び写真類は、長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所に保管している。
5. 本書の総編集は安楽が担当した。
6. 本書で方位の基準としたのは磁北である。図ではM Nの略字を使用した。

調査関係者は以下のとおりである

### 調査担当　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

調査組織	所	長	高野晋司
課	長	安楽勉	
課	長(兼)	町田一久	(壱岐教育事務所)
係	長(兼)	長岡正記	(壱岐教育事務所)
主任文化財保護主事	町田利幸		
文化財保護主事	藤村誠		
文化財保護主事	小玉友裕		
文化財保護主事	中尾篤志		

## 本文目次

I 遺跡の立地と環境	
1. 地理的環境	1 (小玉)
2. 歴史的環境	2 (タ)
II 調査の経緯	5 (安楽)
III 調査	
1. 芦辺町八反地区の調査	
(1)調査概要	7 (中尾)
(2)土層	7 (中尾・藤村)
(3)造構	10 (タ)
(4)出土遺物	15 (中尾)
(5)小結	42 (タ)
2. 石田町池田大原地区的調査	
(1)調査概要	55 (小玉)
(2)土層	55 (タ)
3. 石出町豈ノ木地区的調査	
(1)調査概要	55 (小玉)
(2)土層	59 (タ)
(3)造構及び遺物	59 (安楽)
4. 石出町原ノ久保地区的調査	
(1)調査概要	67 (タ)
(2)土層	67 (タ)
(3)造構及び遺物	67 (タ)
IV まとめ	80 (タ)

## 挿図目次

第1図	壱岐島の位置図	1
第2図	島内遺跡分布図	4
第3図	原の辻遺跡概要図	6
第4図	調査区位置図	8
第5図	調査区土層断面	9
第6図	S D 6 南壁土層断面	10
第7図	調査区遺構配置図	11
第8図	砾群分布状況	12
第9図	25区 S D 5—1層遺物出土状況	13
第10図	南27・28区 S D 5—1層遺物出土状況	14
第11図	S D 5—1層出土土器①	16
第12図	S D 5—1層出土上器②	17
第13図	S D 5—1層出土土器③	18
第14図	S D 5—1層出土上器④	20
第15図	S D 5—1層出土土器⑤	22
第16図	S D 5—1層出土上器⑥	25
第17図	S D 5—1層出土土器⑦	26
第18図	S D 5—II層出土上器	27
第19図	S D 5—III層出土土器	27
第20図	S D 6 出出土器	29
第21図	朝鮮半島系土器	30
第22図	石器・石製品①	33
第23図	石器・石製品②	34
第24図	石器・石製品③	36
第25図	石器・石製品④	37
第26図	石器・石製品⑤	38
第27図	上製品・骨角製品	39
第28図	ガラス製品・金属製品	40
第29図	台地南西部遺構配置図	43
第30図	調査区内における遺構群の変遷	44
第31図	調査区位置図	56
第32図	壹ノ木13-1区遺構配置図・土層図・池田大原8区土層図	57・58

第33図	鹿ノ木13-1区出土1号石蓋上埴輪実測図	59
第34図	出土1号・2号小兒甕棺実測図	60
第35図	出土1号・2号小兒甕棺実測図	61
第36図	出土3号・4号小兒甕棺実測図	62
第37図	出土3号・4号小兒甕棺実測図	63
第38図	出土5号小兒甕棺実測図	64
第39図	出土5号小兒甕棺実測図	65
第40図	出土銅鏡実測図	65
第41図	出土のその他の土器	66
第42図	原ノ久保13-1区出土1号箱式石棺蓋及び1号石蓋土壤龜	68
第43図	遺構配置図・土層図	69・70
第44図	出土1号・2号小兒甕棺実測図	71
第45図	出土1号・2号小兒甕棺実測図	72
第46図	出土3号・4号小兒甕棺実測図	73
第47図	出土3号・4号小兒甕棺実測図	74
第48図	出土6号・8号小兒甕棺実測図	76
第49図	出土6号・8号小兒甕棺実測図	77
第50図	出土9号小兒甕棺実測図	78
第51図	出土9号小兒甕棺実測図	79
第52図	出土その他の土器	79

## 表 目 次

第1表 観察表	41
---------	----

## 図版目次

図版1	調査区遠景（南より）・調査区航空写真	49
図版2	縄群検出状況（西より）・北区縄群検出状況（東より）・南区縄群検出状況（西より）	50
図版3	杭列検出状況（東より）・銅鏡出土状況・袋状鉄斧出土状況	51
図版4	北区SD5検出状況・甕棺出土状況①・②	52
図版5	SD5-I層掘り下げ調査風景・SD5-I層獸骨出土状況①・②	53
図版6	SD5-I層獸骨出土状況③・南区SD6検出状況（南より）・SD6南壁土層断面	54
図版7	池田大原・芦ノ木・原の久保調査区全景（航空写真）・調査区近景	81
図版8	芦ノ木13-2区南東側土壙・芦ノ木13-1区調査区全景	82
図版9	芦ノ木13-1区1号石蓋土壙墓検出状況（上面）・同区1号石蓋土壙墓検出状況（下面） 同区1号・2号・3号小児甕棺蒸検出状況	83
図版10	芦ノ木13-1区4号甕棺墓検出状況・同区5号甕棺墓検出状況・同区銅鏡出土状況	84
図版11	調査地近景（原ノ久保13-1区）・同区南側土壙	85
図版12	原ノ久保13-1区1号石蓋土壙墓検出状況（上面）・同区1号石蓋土壙墓検出状況（下面） 同区1号小児甕棺墓検出状況	86
図版13	原ノ久保13-1区2号・3号・4号小児甕棺墓検出状況・同区4号小児甕棺墓検出状況	87
図版14	原ノ久保13-1区6号小児甕棺墓検出状況・同区8号小児甕棺墓検出状況 同区9号小児甕棺墓検出状況	88

## I. 遺跡の立地と環境

## 1. 地理的環境

九州の北西海上の玄界灘に位置する壱岐島は、朝鮮半島釜山から対馬まで約52km、対馬から壱岐及び壱岐から福岡県博多まで約68km、壱岐から佐賀県呼子まで約26kmの距離に位置し、面積約139km<sup>2</sup>、東西約15km・南北約17kmの本島と多くの小島から構成され、人口は約3万4千人の島である。福岡県博多港まで約2時間半、ジェットフォイルで約1時間、佐賀県呼子港までフェリーで約1時間で結ばれている。長崎県への直通の海上交通がないため、行政的には長崎県に属しているものの、文化的・経済的には移動に便利な福岡県博多を利用することが多い。

島の地形は全体的になだらかな地形になっており、高度100mを越す山地が占める面積は極めて小さく、巣敷における最高峰である岳の辻でも標高213mで、険しい山々からなる対馬の風景と比較すると、優雅で女性的な姿をしている。気候は長崎県本土の長崎市や佐世保市と比較すると、年間を通して気温は低いが、同緯度の他の地域と比較すると夏季は涼しく冬季は同程度かやや暖かい。また降雪や積雪もまれである。年間降水量は、長崎県本土と比較するとやや少ないが、全国的にみると多いほうに属する。島の西から東にかけて雑鉄川が流れ、その下流には後世の千拓事業による県央の諫早平野を除けば、県下最大の穀倉地帯である深江田原と呼ばれる平野が広がる。

原の辻遺跡は、深江田原の台地状になった小高い丘を中心とした約100haの地域（芦辺町と石出町にまたがる）に分布している。



第1図 壱岐島の位置図

## 2. 歴史的環境

壱岐は対馬と共に朝鮮半島（朝鮮半島釜山までは約52km）、九州本土（佐賀県呼子港までは約26km、福岡県博多港までは約68km）への移動に便利な地勢から、古来より交通・交流の要衝、防衛の拠点としての役割を果たしていた。ここでは弥生時代を中心に、壱岐島では古来よりどのような活動が行われていたのか、また朝鮮半島・大陸とどのような交流が行われていたのかを述べてみたい。

壱岐島における旧石器時代の遺跡は、原の辻遺跡・カラカミ遺跡・奥原遺跡など僅かに見られるだけで、遺物としては台形石器・ナイフ形石器・絆石器やナウマン象の臼歯などが出土している。

繩文時代の遺跡は約20ヵ所ほどが発見される。松崎遺跡・鐘崎遺跡・名切遺跡など壱岐島の西側の海岸沿いに存在するものが多く、漁労・採集を中心とした生活を送っていたと考えられる。前述の3遺跡は、大潮前後の干満時にだけ遺跡が現れる干潟帯遺跡である。

弥生時代の遺跡は、原の辻遺跡・カラカミ遺跡・車出遺跡を始め、現在約60ヵ所確認されている。壱岐についての記述が歴史上初めて見られるのは、中国の歴史書『三国志』「魏志」倭人伝である。「（対馬國から）南に渤海という海を渡り、千余里行くと一大國（一支国）に着く、長官は卑狗といい、副官を卑奴母離という。竹木・叢林が多く、三千ばかりの家がある。やや田地があり、田を耕してなお食べるには足らず、また南北に海を行き来し、米などを買ってくる。」と、弥生時代終末期当時の様子が紹介されている。ここで記載されている一大國（一支国）の王都と特定されているのが、原の辻遺跡である。

原の辻遺跡の発見・報告は古く、大正時代から昭和初期まで遡る。平成5年以降本格的な調査が始まり、台地部を取り囲む多重の環濠・道路状の遺構、台地頂上部の高床式建物の柱穴跡、台地西側で発見された東アジアでは最古とされる船着き場の跡、石器遺構・水田の畔壁遺構などが確認されており、出土遺物としては、五銖銭・大泉五十・貨泉などの大陸波來の貨幣、三輪系の瓦質上器や無文土器など朝鮮半島系の土器、内行花文鏡、規矩鏡など中國製の鏡などが発見されている。集落の形成は、弥生時代前期の末に始まり、弥生時代中期前半には多重の環濠を周囲に巡らせて整備したのではないかと考えられる。遺跡の規模・遺構や遺物の質や量など、他の島内の弥生時代の遺跡と比較しても一支国（支那）の王都と特定されるに相応しい遺跡であると言える。

近年の発掘調査の成果としては、平成11年度に芦辺町教育委員会主体の発掘調査の際に出土した、原の辻遺跡における市の存在の可能性を想像させる、後漢の權（重さを量るための錘）や、平成13年に同じく芦辺町教育委員会による発掘調査の際に出土した「埋葬」状態で見つかった人骨、平成13年度特定調査の際に出土した、祖靈信仰の際に使用されたのではないかと考えられるユーモラスな表情をした人面石などがある。その他夥しい数の遺構・遺物が発見されているが、まだ遺跡全体の1割にも満たない範囲の調査が済んだにすぎず、今後の調査報告が待たれるところである。

カラカミ遺跡は、壱岐島の中央部や西側、標高80m程の丘陵に位置し、面積は約5haと確認されている。遺跡の東側と南側は、刈田院川により浸食された急な崖になっており、北側と西側は比較

的緩やかな地形となっている。遺跡の北側には防御用と見られる、断面がU字形をした環濠が巡っていることが確認されている。時期は、原の辻遺跡同様に弥生時代前期から後期（紀元前2世紀から紀元3世紀）にかけて最盛期を迎えていたようである。

出土遺物として特徴的なものは、鯨の骨で作ったアワビ起こし・釣り針・鉛・石錘など漁労関係の遺物の他、朝鮮半島との交流を想像させる朝鮮半島系の土器、古いをする際に用いられたのではないかと考えられる卜骨などが出土している。このことから、カラカミ遺跡は、規模的には原の辻遺跡には及ばないが、漁労と交易に從事していた集落であったことが考えられる。

車出遺跡は、壱岐島の中心やや南西、轄鉢川上流に位置し、遺跡の北側にある鉢形山には、国重文に指定されている滑石製如來座像が出土した経塚と、日式内社の天手長男神社がある。

出土遺物としては、船載鏡の獸帶鏡片など銅鏡2枚、貨泉1枚・銅鏡3本など大陸との交流を示す青銅製品や、丹磨磨研土器の壺や小型供獻土器など、祭祀的な目的で使用されたと思われる土器などが出土している。付近には田ノ上遺跡や鉢形山遺跡などが隣接しているが、車出遺跡の遺物の分布状況から判断してそれらと同じ範囲のものと考えると、この辺りにも有力者が存在しており、北から南に湧入した半城湾からの侵入に備える防護拠点としての役割を持っていたと考えられる。

壱岐島の弥生時代の遺跡として前述した3つの遺跡は、いずれも内陸部に位置する遺跡であるが、内陸部だけではなく、海岸部にも多くの弥生時代の遺跡は存在している。中でも壱岐島の北部、勝本町に位置する大ヶ原遺跡が注目される。ここでは、海岸線の護岸工事中に馬をのぞむ海岸の石祠の下から国産の3本の中古銅矛が出土した。隣りの対馬とは対照的に壱岐で銅矛が出土することは珍しいが、銅矛の一部が露出していたものを抜き取ったため、埋納時の配置は不明である。壱岐島での勝本浦は、古代より海外交流に際しての最重要寄港地と位置づけられており、航海の安全を祈願するために埋納されたのではないかと考えられる。

壱岐島の古墳の数は江戸時代では338基との記録が寛保2年（1742）編纂の『壱岐國統風土記』に記載され、天保8年（1837）には296基の古墳があると『甲子夜話』（松浦静山）に記されている。現在の壱岐島での古墳の数は250基を越え、長崎県全体の約半数を占めている。

代表的なものをいくつかあげてみると、轄鉢川が作る島内最大の平野である深江田原の北側で、原の辻遺跡を一望できる位置にある大塚山古墳がある。この古墳は、石室の構造・出土遺物から5世紀の後半に築造されたものと考えられる。双六古墳は、壱岐島のほぼ中央で標高110mほどの丘陵頂部に位置し、南側を除いて周辺はなだらかな地形になっており、全長が89.5mで長崎県下でも最大級の前方後円墳である。笠塚古墳は、壱岐島のほぼ中央の標高100mあまりの低平な溶岩台地上に築かれた古墳の直径66m・上段の墳丘の直徑38m・高さ10mほどの円墳で、出土した遺物で特に注目すべきものとして、金銅製の飾り金具を付けた馬具がある。その他の注目すべき古墳としては、捕鯨の様子を描いたものとされる線刻画が描かれた鬼屋窟古墳がある。

古代の壱岐島は、対馬と共に大陸からの文化流入の窓口としての役割を担うが、一旦大陸との関係が緊張状態になると防衛の最前線となる。663年の白村江における敗戦後には、防入が派遣され、蜂

を置いて唐・新羅の侵入に備えた。その後律令制が崩壊するにつれ、中央の外敵に対する防衛意識は希薄になり、9世紀の後半から倭岐島は度々襲撃を受けている。特に895年に新羅の賊が侵入した際は島内の官舎がことごとく焼失したとされている。また1019年には、中国東北部に拠点を持つ女真族による襲撃を受け(刀伊の入寇)、倭岐守藤原理忠までが戦死するという甚大な被害を受けている。

倭岐は対馬と並び大陸・朝鮮半島と九州本土との交通・交流の要衝であるという地勢状の特性から、良くも悪くも海外の影響を多分に受けやすい位置にあったといえる。



第2図 島内遺跡分布図

## II. 調査の経緯

昭和26年から始まった東亜考古学会によって行われた学術調査は、原の辻遺跡の重要性を学界に広く知らせる結果となった。しかし、当時としては関係者だけには重要度が認識されたものの、地元に対しての理解は浸透していなかった。そのため、高度成長期を迎えると、遺跡が広がる台地の宅州の饅頭畠と呼ばれる耕作地は、ボーリングで湧水を得られると、またたく間に水田と化していった。切り盛りされた水田は、かなりの損壊を受けたことが、現在進行中の調査からも窺える。

昭和49年に実施された水田化改良工事に先立つ石田大原の調査では弥生前期末～中期を中心とする箱式石棺墓と甕棺墓及び区画溝などが集中して検出され、新たな遺跡の保護策が検討された。その結果、昭和50～52年度にかけて台地部分を中心に国庫補助事業による範囲確認調査を実施することになった。遺跡の広がりは、北側に向って突き出ている舌状台地の部分と、南側の大川橋周辺まで拡がりを見せることが確実となり大きな成果を上げることになった。

平成3～5年度にかけては、幡ヶ谷川流域総合整備事業が計画された。内容は河川改修や堤防整備、農道の整備を広範囲に行うもので、主に台地をとりまく低地部分が調査対象とされ、東側は小川川と西側は池田川に接する部分までを実施した。その結果、遺跡の範囲は約100ヘクタールに及ぶことが判明した。また時期的には旧石器時代から弥生時代、古代、中世に至るまでの複合遺跡であることも確認された。この低地部の工事部分については関係部局と協議の結果、開場面については客土を行い遺跡を保護するが、農道および排水路、河川については調査を実施することとなった。

平成7年度以降の調査

平成7年度からは改めて国庫補助事業による範囲確認調査を進めることになった。これまでの調査は点的な性格が強かったが、画的な広さを保ちながら、遺構等の範囲や性格についてより具体的なデータを得ようというものである。

7年度は原地区の丘陵頂上部分と、大川地区の墓域の調査を行い、頂上部分では遺跡の中核である祭儀建物群や東西方向に走っている区画溝を検出している。平成8年度は原地区で弥生中期から古墳前期の堅穴住居跡9棟、溝4条、濠2条、小児甕棺墓6基などや原ノ久保A地区では箱式石棺墓13基や集石遺構4基、土墳墓6基、小児甕棺墓3基などを調査した中で第8号石棺から小形仿製鏡1面と9号土墳から長宜子孫面の内行花文鏡1面などが出土し、弥生終末における有力者階層の墓地であることが認められた。平成9年度は芦迎町原、高元地区と池田大原、原ノ久保B地区を調査し、原地区からは弥生中期～古墳前期の堅穴住居17棟、小児甕棺5基などの成果を得ている。平成10年度は石田大川地区から初期貿易陶磁とともにイスラム陶磁1点が出土し、この地区に古代の公的施設があった可能性を示唆した。11年から13年度にかけては台地西側の低地部でIH河道や環濠の追跡調査を行い、顕著な成果をあげている。また台地部については原ノ久保A地区の西側において新たな墓地の発見があり谷状地形を挟んで弥生中期から後期の墓地が形成されたことも判明した。

以上のように範囲確認調査は遺跡の全貌を解明する上で大きな成果を上げてきている。



第3図 原の辻遺跡概要図 (1/8000)

### III. 調査

#### 1. 八反地区的調査

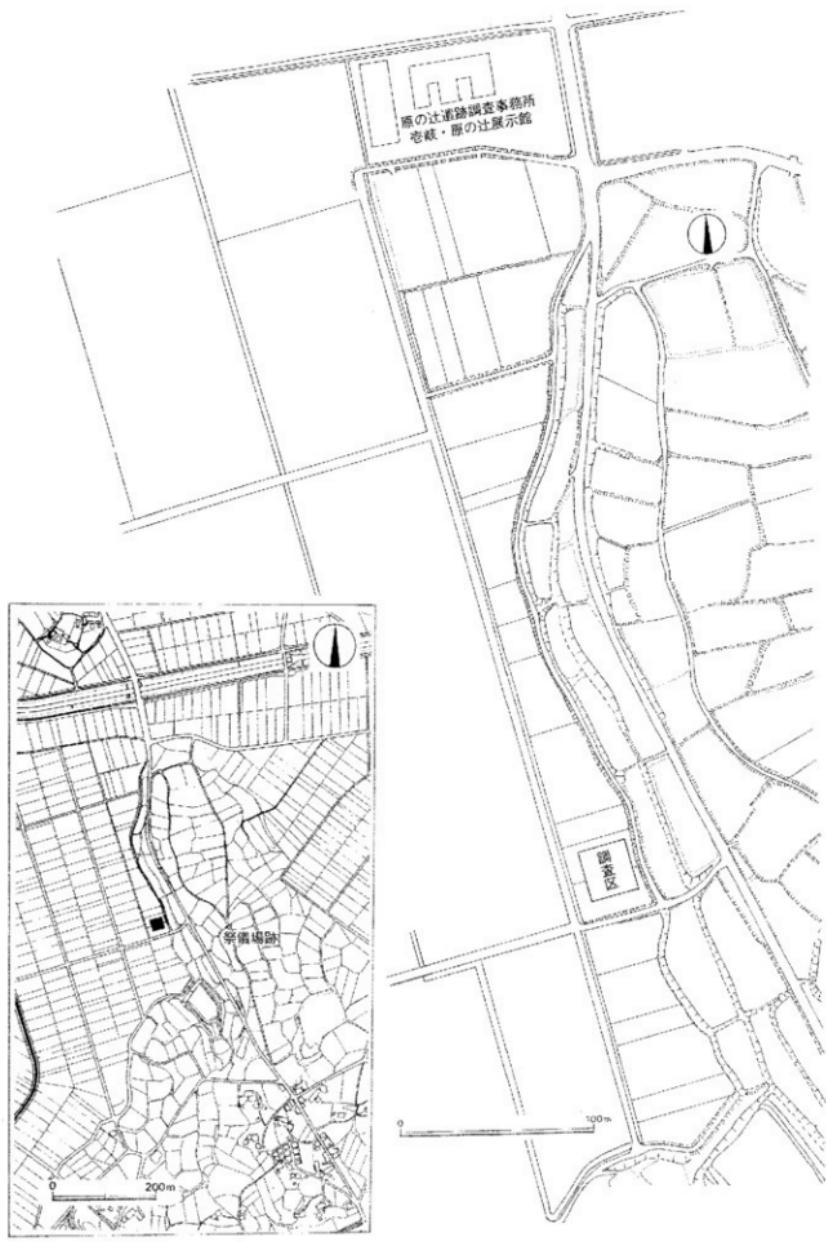
##### (1) 調査概要 (第4図)

平成13年度の原の辻遺跡の調査は、これまで遺構の内容が不明瞭であった台地南西部の低地部分における弥生時代の遺構確認を目的として、八反地区において複数の調査が集中的に行われた。台地南西部については、すでに平成12年度の轟鉢川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う緊急発掘調査が行われ、溝状遺構6本と水田遺構およびこれに伴う矢板列や柱跡跡が検出されている。しかし、南北方向の細長いトレンチ調査であったために、遺構群の面的な展開を確認するには至らなかった。今年度の環濠等状況調査（以下、特定調査）や緊急雇用対策事業（以下、緊急雇用調査）では、台地南西部の面的な調査が行われ、複数の環濠および旧河道が検出されている。国庫補助事業として行った調査区は、特定調査事業調査区と緊急雇用対策事業調査区に挟まれた地域で、南北26m、東西25mの調査区を設定し、650mにわたって発掘調査を実施した。調査方法は、調査区北壁から13m地点に東西方向に上層観察用のベルトを残し、調査区全体を面的に掘り下げるとともに、調査区全体に5m四方の小グリッドを設定して遺物の取り上げを行った（第7図）。

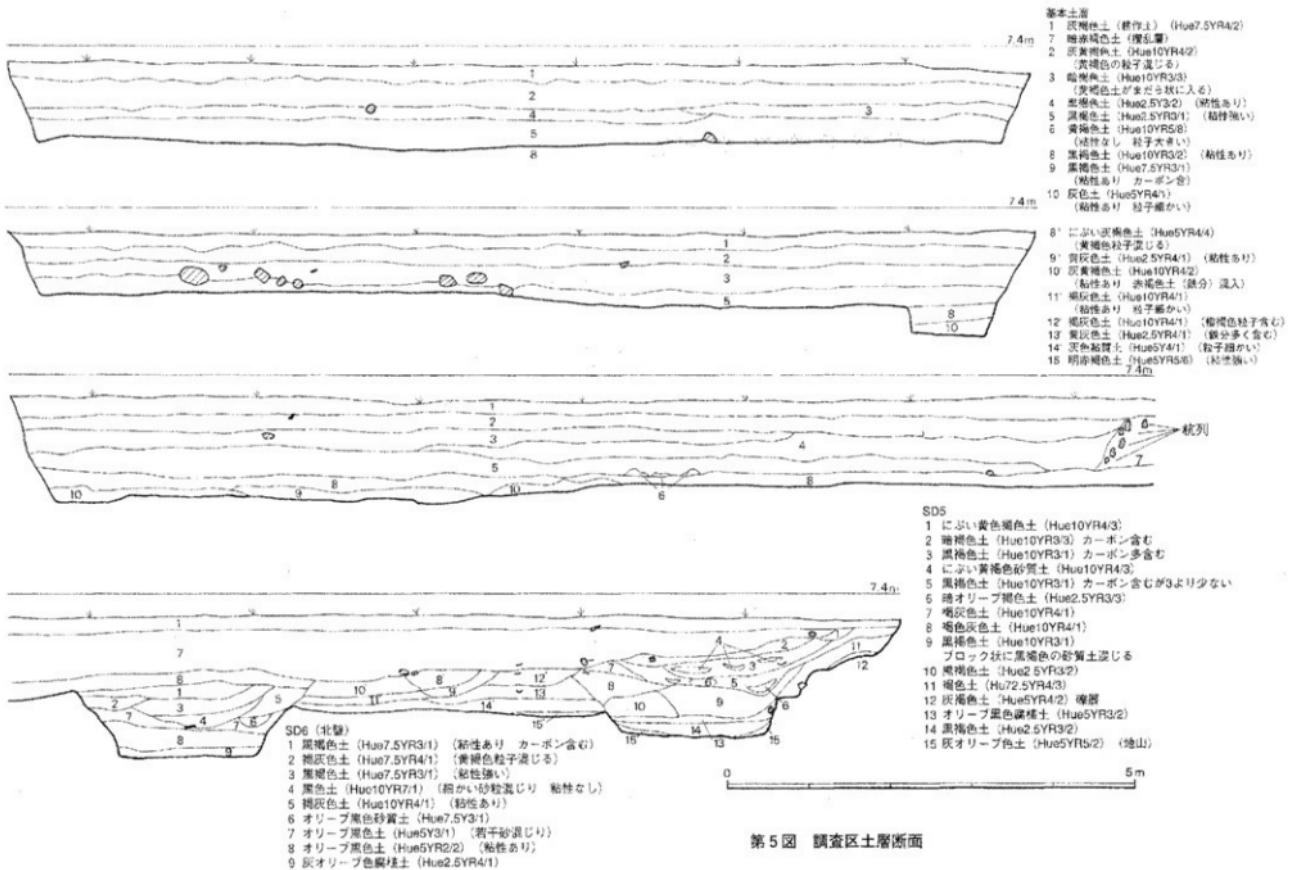
その結果、弥生時代後期の遺構として、南北に延びる環濠1本・旧河道1本が検出されたほか、環濠埋没後の土地の造成に伴うものと見られる礫群や杭列などが検出され、調査区内における弥生時代の遺構群の様相が明らかになるとともに、弥生時代以降の過渡的な土地利用のあり方についても多くの知見を得ることができた。ただし、環濠および旧河道については、時間の制約上完掘には至らず、環濠・旧河道の延びる方向の確認および堆積状況の確認にとどまった。

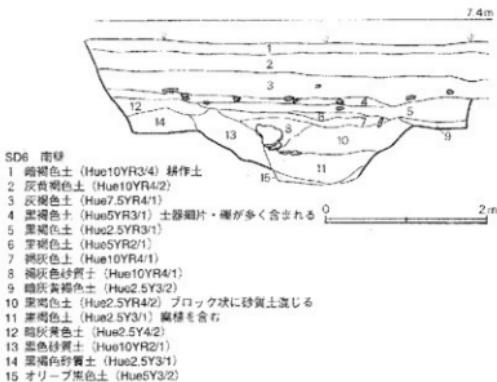
##### (2) 基本土層 (第5図)

本調査区の基本層序は、次の1~10層である。1層は耕作土である。2層は灰黄褐色土で粘性弱く、黄褐色の粒子が混じる。3層は暗褐色土で黄褐色土がまだら状に混じる。4層は粘性のある黒褐色土である。この層は、北壁の1区以西、西壁の4区以北には分布しない。5層は粘性の強い黒褐色土であり、この層の下面に沿って6層がブロック状に堆積する。6層の堆積は北壁7区でのみ確認できる。7層は黒褐色土であるが、赤褐色粒子を多く含む、しまりもない。北区西半および南区北西部分以外に分布し、細片化した弥生土器など弥生時代の遺物を多く含む。8層・9層・10層は、土層確認トレーニングで部分的に確認したにとどまる。8層は粘性の強い黒褐色土で、10層はきめが細かく粘性の強い灰色の地山である。9層は北壁1区~7区にかけて確認した土層で、10層を切り込むようにレンズ状に堆積する。比較的浅い堆積であることから自然の落ち込みと判断したが、部分的な掘り下げにすぎず、人為的な遺構の可能性もある。このほか、北区のSD5とSD6に挟まれた部分については、7層以下の堆積土が異なっており、SD6以内に比べて赤みの強い上層となる。弥生時代の遺構は、10



第4図 調査区位置図 (1/25,000, 約1/10,000)





第6図 SD 6 南壁土層断面

### (3) 遺構

本調査区で検出された遺構は、環濠もしくは旧河道と思われる遺構2条(SD 5・SD 6)、礫群1基、杭列1条である。このうち、弥生時代の遺構はSD 5・SD 6である。

#### ① SD 5 (第7図・第9図・第10図)

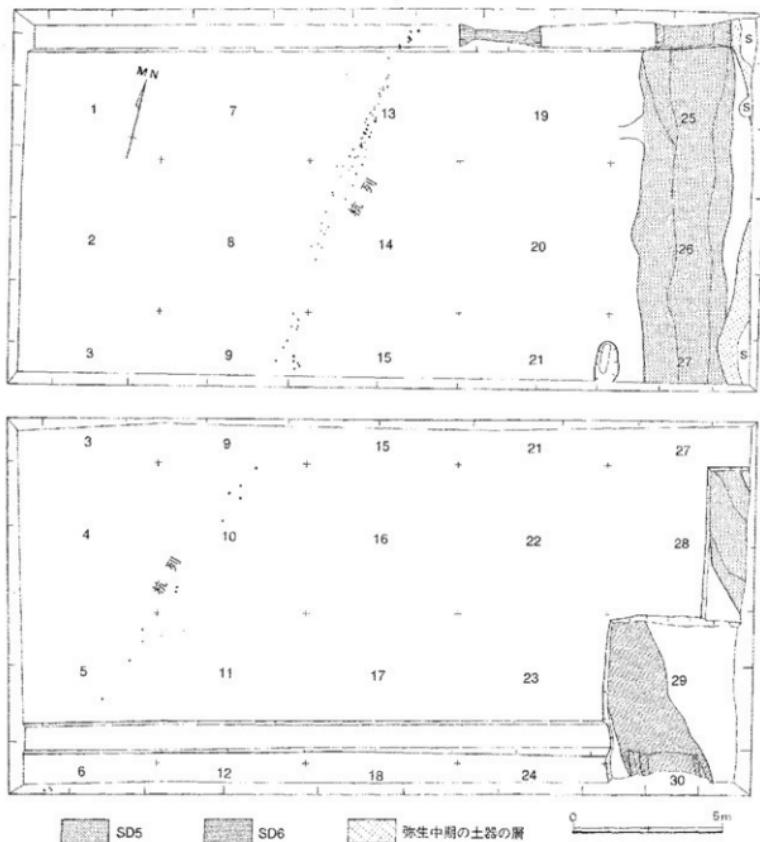
SD 5は、調査区の東壁に沿って南北に走る環濠である。北区ではほぼ直線状に伸びるもの、南区で東に大きく湾曲し28区で東壁にぶつかる。遺構上面は削平されており構築時の規模は不明であるが、規模では幅約4m、深さ約1mとなり、断面の形状は逆台形型である。環濠内の土層は、色調および土質によって大きく上下2層に分けることができる。すなわち、カーボンを多く含み黒褐色を呈する2~5層(上層)、カーボンを含まず、部分的に砂質土や腐植土が混じる7層以下(下層)である(第5図)。出土遺物の大半は上層から出土しており、弥生時代後期後半の土器を中心に古墳時代前期の土器も少量出土している(第9図・第10図)。また、この環濠の東に隣接した部分から弥生時代中期前葉から後葉の土器が検出された。土層断面では環濠内の11層に対応するものと思われる。おそらく弥生時代中期段階の環濠に相当するものと考えられるが、西側の掘方は後期の再掘削で消滅し、東側の掘方も調査区外であることから、環濠の規模については不明である。このように、SD 5は弥生時代中期にいったん掘削され、中期後葉に埋没した後、後期に再び掘削されたことがうかがえる。なお、後期における再掘削は、中期環濠よりもやや西側を掘削している状況が読みとれる。

#### ② SD 6 (第6図・第7図)

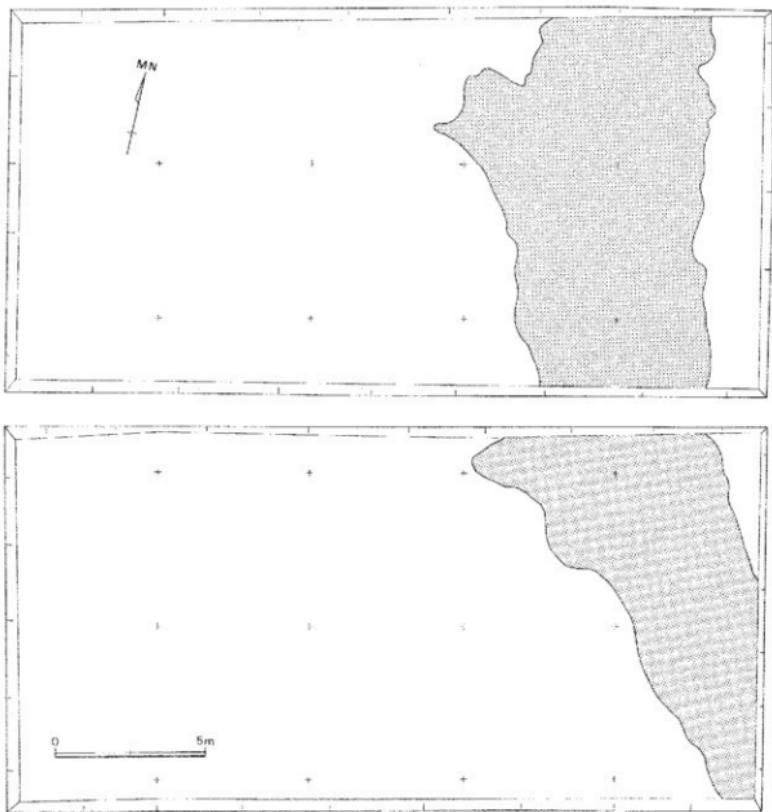
SD 6は北区19区および南区29区~30区の遺構確認トレンチにおいて部分的に検出したにすぎないが、調査区を南北に横切るようにSD 5と併走し、調査区南東隅に達するものと思われる。検出時の規模は、幅約3m、深さ約1mで、断面形態は逆台形型となる。北壁と南壁で確認した床面の標高は、約5.4mでほとんど勾配は認められない。埋土内には、流木のほか砂層や腐食土層がブロック状に堆積していることから、旧河道の可能性が強いが、掘方から床面にかけての傾斜がきついことや、幅が

層の地山および8°~15°の赤みの強い土層を切るように構築されている。

土層の堆積状況としては、弥生時代の遺構埋没後、これらを覆うように北壁西半で確認される8層が堆積した後、調査区東半部を中心にして7層が厚く堆積し、その後7層の分布域よりも西側の部分で、2~6層が順次堆積していったことが観察される。



第7図 調査区造構配置図（数字はグリッド番号）



第8図 緾群分布状況（網かけ部）



第9図 25区 SD 5-1層遺物出土状況

比較的狭いことを考慮すると、堰方の掘削など人為的な所作が加えられている可能性が高い。出土遺物は上半部に偏って出土しており、弥生時代後期後葉の土器のほか、楽浪系の瓦質土器も出土している。

### ③礫群（第8図）

調査区の東半部を覆うように礫群を検出した。礫群は、SD 5・SD 6 の埋没後、わずかな間隔を挟んで堆積しており、もっとも厚い部分で約20cmの堆積が認められる。礫群の構成は自然の円礫・角礫が中心となるが、これらに混じって凹石・磨石・敲石が比較的多く認められる。また、弥生土器を中心とする上器類が細片化された状態で出土しており、これらが踏み込まれた状態で非常にしまった礫層を形成している。礫群の供給源については、沿岸部での礫の採集も考えられるが、弥生時代関連

の遺物が多く出土することから、調査区東側に隣接する台地の削平土が中心になるものと推定される。遺物は先述の弥生時代の遺物のほか、古代から近世にかけての遺物が認められることがから礫群の構築された時期は限定できないが、出土遺物の中でもっとも新しい近世を想定しておく。性格としては、埋没後も沼沢地となっていた S D 5 および S D 6 の墳化が目的であったものと考えられる。

#### ④杭列（第7図）

調査区北壁中央部から調査区南西隅にかけて、杭列を検出した。径約 5 cm 程度の太さの杭を中心としており、北壁の観察から、7 層の堆積時に打ち込まれたことが確認できる（第5図）。杭列の分布は、北壁で確認された 7 層の分布の西限と一致しており、杭列を境に調査区東半部分にのみ 7 層が広がっている。したがって、この杭列は 7 層の堆積と一連の遺構であることがうかがえる。7 層中からは須恵器や陶磁器類に混じって、弥生土器のほか細石刃核や銅鏡・小玉などの遺物が混在した状態で出土していることから、礫群と同様、弥生時代の包含層を破壊するような台地上の大規模な削平に伴う造成上と考えられ、杭列もこの造成に伴う遺構であると考えられる。時期は出土遺物の時期幅が大きいために特定はできないが、もっとも新しい近世頃をあてておく。



第10図 南27・28区 S D 5-1 層遺物出土状況

#### (4) 出土遺物

##### 1. 土器

本調査区では、SD5・SD6のほか、礫群や7層中からも細片化された状態で大量の土器類が出土した。ここでは、SD5・SD6出土の弥生土器を中心に報告する。SD5では、遺物包含層が上層と下層に区分されるとともに、SD5の東側に隣接した部分からも弥生時代中期の遺物が出土している。ここでは便宜的にSD5上層をSD5Ⅰ層、SD5下層をSD5Ⅱ層、東側隣接部分をSD5Ⅲ層として報告する。なお、土層断面との対応関係は、SD5Ⅰ層がSD5北壁土層断面の1～6層、SD5Ⅱ層がSD5北壁土層断面9層、SD5Ⅲ層がSD5北壁上層断面11層にはほぼ対応する(第5図)。

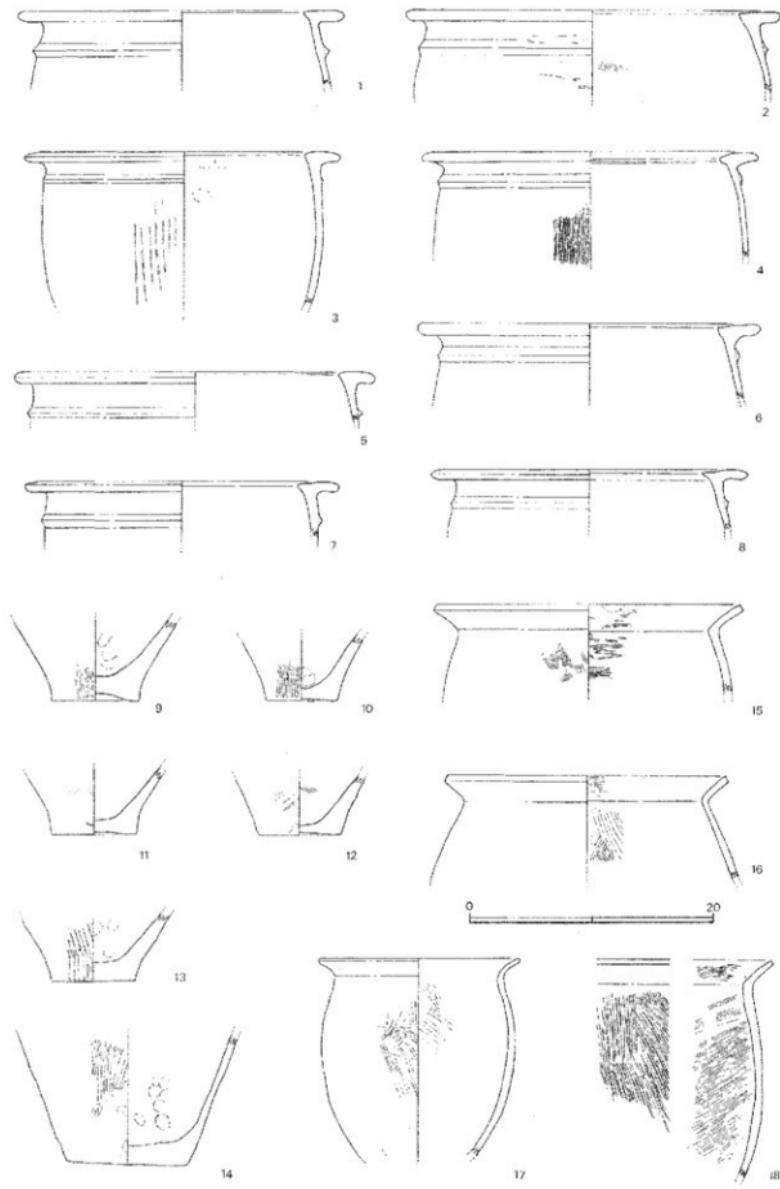
###### ① SD5Ⅰ層出土土器

第11図1～8は、敏先状口縁の壺である。1は、口縁上端が平坦で内面はやや突出する。口縁部の厚みは一定で、口縁直下に一条の三角突帯を有する。外面・内面ともに丁寧ななで調整が施される。2は口縁上面は平坦であるが、やや内傾する。口縁の厚みはほぼ一定で、口縁下に低い三角突帯が一条めぐる。内外面ともになでている。3は、口縁内面がわずかに突出し、口縁上面はやや丸みを帯びてわずかに外傾する。内外面ともになでているが、胴部外面には刷毛日の痕跡がわずかに残る。4は口縁内面が突出し、上面は丸みを帯び、口縁全体がやや内傾する。口縁直下に低突帯を1条有し、内外面ともになで調整が施される。胎土は堅硬で焼成は良好である。5は口縁上端が丸みを帯び、端部はやや重れ気味になる。口縁下に低突帯を持ち、内外面ともなで調整で焼成は良好である。6の口縁は水平で、やや内傾している。7・8は口縁内面が突出し、端部が重れ気味になる資料である。いずれも内外面ともにナデ調整で仕上げている。

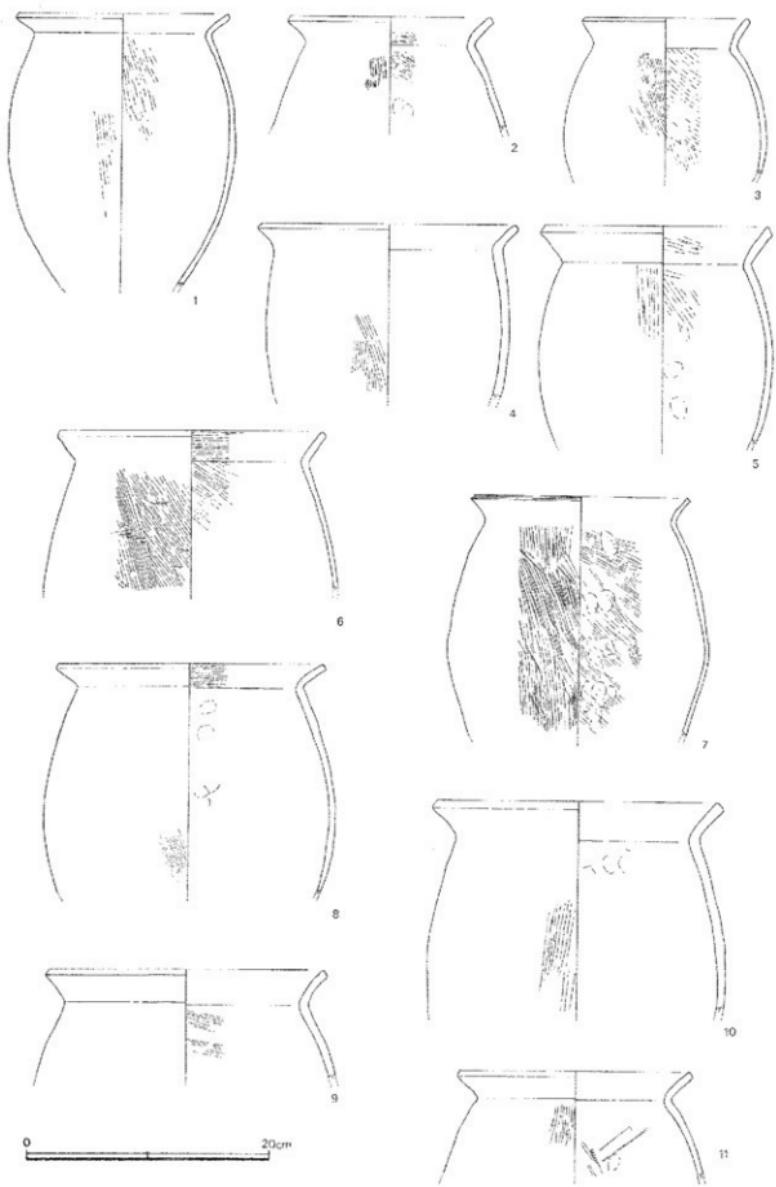
9～14は壺の底部である。9は上げ底であるが底部は薄く仕上げている。外面はハケメをナデ消している。10～12は平底に近いがやや上げ底気味である。いずれも底部の厚さは薄い。13・14は平底の資料である。13の立ち上がりがややくびれるのに対して、14は直線的に斜めに立ち上がる。13の外面にはハケメが明瞭に残る。

15～18は「く」の字口縁の壺である。15・16は口縁端部が面取りされ、屈曲部の内面に明瞭な稜が認められる。15は口縁端部がやや厚みを帯びるのに対して16は口縁部の厚みがほぼ一定で、全体的に薄手に仕上げている。両者とも内外面のハケメをナデ消している。17は口縁端部が丸みを帯び、屈曲部分は内外面ともに緩やかな曲線を描く。器殻は全体的に薄手である。18は口縁部が直線的に開き、端部に面取りがなされ、屈曲部には明瞭な棱線が認められる。胴部外面にはハケメが明瞭に残り、内面はハケメを軽くナデ消している。胎土には長石・石英を含み焼成は良好である。

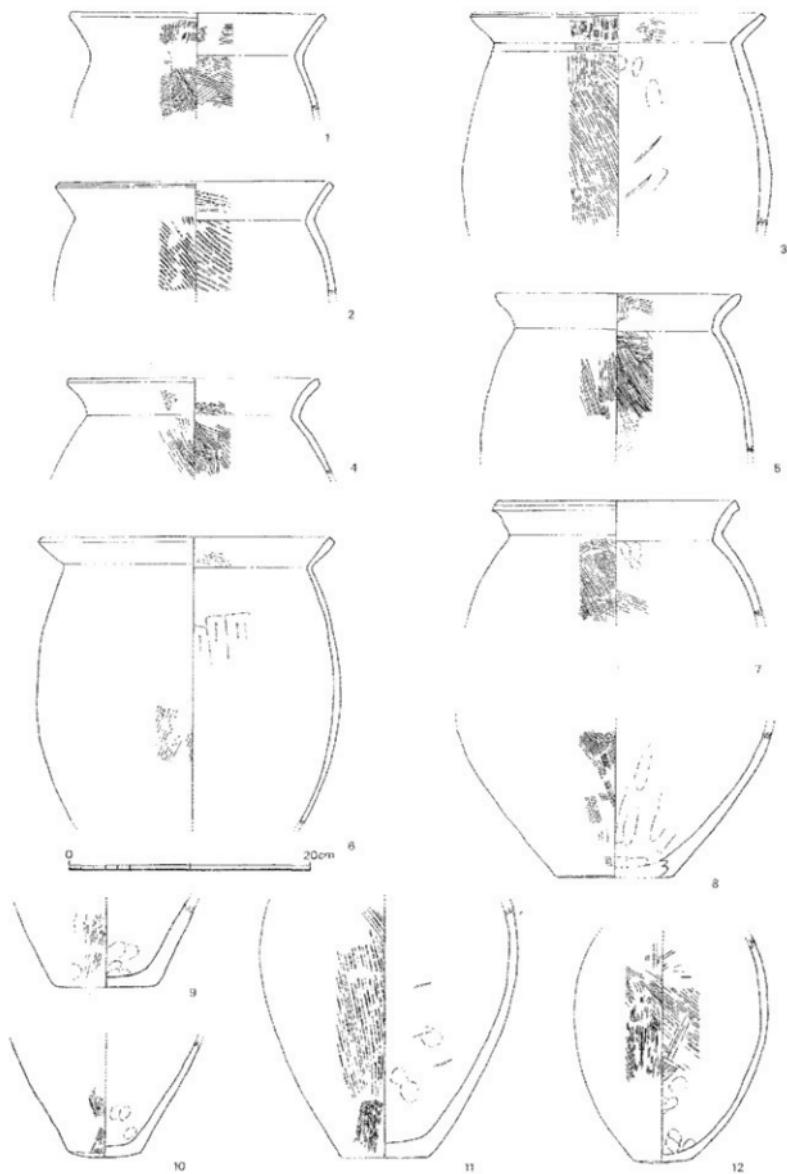
第12図はいすれも「く」の字口縁の壺である。1は口縁端部が平坦で胴部が張る資料である。屈曲部の内面には明瞭な稜を残す。内外面ともにハケメを丁寧にナデ消し、全体的に薄手に仕上げる。2は口縁部がやや外傾して立ち上がり、端部にかけて肥厚している。胴部から頸部にかけては直線的にすぼまる。頭部は内外面ともに丸みを帯びており、稜線は不明瞭である。内外面ともにハケメの後ナデ調整を施し、内面にはさらに指押さえの痕跡を残す。胎土には石英・長石のほか金雲母を含む。



第11図 SD 5--I層出土土器① (S=1/4)



第12図 SD 5-I層出土土器② (S=1/4)

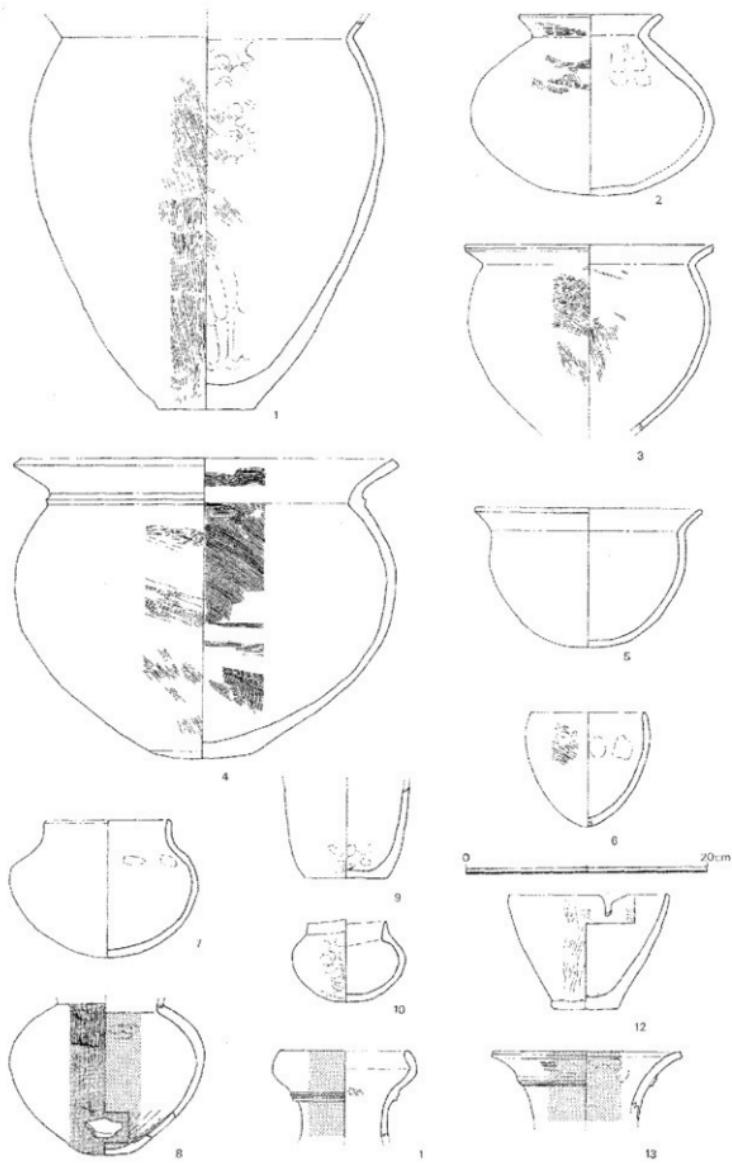


第13図 SD 5-I層出土土器③ ( $S=1/4$ )

3は丸みを帯びた胴部を持つ資料で、口縁内面は丸みを帯び、端部は水平におさめる。頸部内面の稜は鮮明であるが、外面は緩やかに立ちあがる。内外面ともにハケメをナデ消している。胎土に金雲母を含む。4は胴部の張りが弱く、口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。頸部内面には棱線を持つ。胎土には金雲母を含み、色調はにぶい黄橙色である。5は頸部が張り、頸部から口縁部にかけて稜を持つて屈曲する。口縁部は端部にかけて肥厚し、端部は平坦におさめる。石英・長石を含む。6は長胴の甕で、口縁はきつくなっている。器壁は薄く仕上げている。7は長胴の甕で頸部から緩やかに立ち上がる短い口縁を有する。口縁端部は面取りがなされ、溝状に若干くぼんでいる。胴部外面にはハケメを残し、内面はハケメの後指押さえで調整している。全体的に薄手に仕上げており、胎土には金雲母を含む。8も長胴の甕と思われる。口縁部のたちあがりは弱く、頸部内外面ともに稜を持つ。口縁端部は平坦である。器面は全体に丁寧なナデ調整がおこなわれており、内面には指頭圧痕残る。胎土には金雲母含む。9は口縁部が長く伸び、たちあがりもきつい。内面はハケメを丁寧にナデ消している。胎土に金雲母を含む。10は長胴で比較的厚手である。器面の調整もハケメを丁寧にナデ消しており、内面には指押さえの痕跡残る。11は頸部でいたんくびれ、口縁部にかけて屈曲する。端部は軽くなれて平坦におさめる。胎土に金雲母を含む。

第13図は、「く」の字型口縁の甕および底部資料である。1は口縁が長く伸びたちあがりもきつく、頸部外面には明瞭な稜を持たない。口縁部から胴部にかけて外面に細かい縦方向のハケメが施され、口縁部はナデ消している。内面にも横・斜め方向のハケメが顕著に認められる。胎土に金雲母を含む。2も胴部から口縁部がきつくなっている。端部は平坦におさめている。胴部内外面ともに斜め方向のハケメが残る。3は長胴で口縁のたちあがりはシャープである。口縁端部は平坦におさめるが中央は沈線状にくぼむ。4は口縁が外反気味にたちあがり、端部は丸く収めている。頸部から口縁端部にかけてやや肥厚する。胎土はきめが細かく金雲母を含む。5は頸部から外反気味にたちあがり、端部はやや内傾して丸くおさまる。口縁部内面も丸みを帯びている。胴部外面には煤が付着している。胎土に金雲母含む。6は長胴の甕で、胴部内面は縦方向のケズリにより薄く仕上げている。口縁部は端部にかけて肥厚し端部は平坦におさめる。胎土に金雲母含み精選されて緻密である。7は口縁部が外反気味にたちあがり、端部は平坦でやや外側に垂れる。胴部外面は細かいハケメを軽くナデ消し、内面はハケメの後ナデおよび指押さえで仕上げる。胎土には石英・長石のほか金雲母を若干含む。

8は平底の底部である。内面に指ナデの痕跡が縱方向に残る。9も平底の底部で胴部に向けて直線的にたちあがっている。底部は薄い。10は凸レンズ状の底部で、底部は薄く、内面はナデおよび指押さえで仕上げる。外面はタテハケをナデ消している。11は平底の底部で、胴部にかけて丸みを帯びて立ちあがる。胴部から底部にかけて次第に厚みを増し底部がもっとも厚くなる。外面はハケメを軽くナデ消し、底部外側にもハケメが残る。12は凸レンズ状で比較的径の小さな底部から丸みを帯びて立ちあがる長胴の甕である。底部内面は指ナデにより丸みを帯び、底部の厚みは薄く、稜線がなくなつ



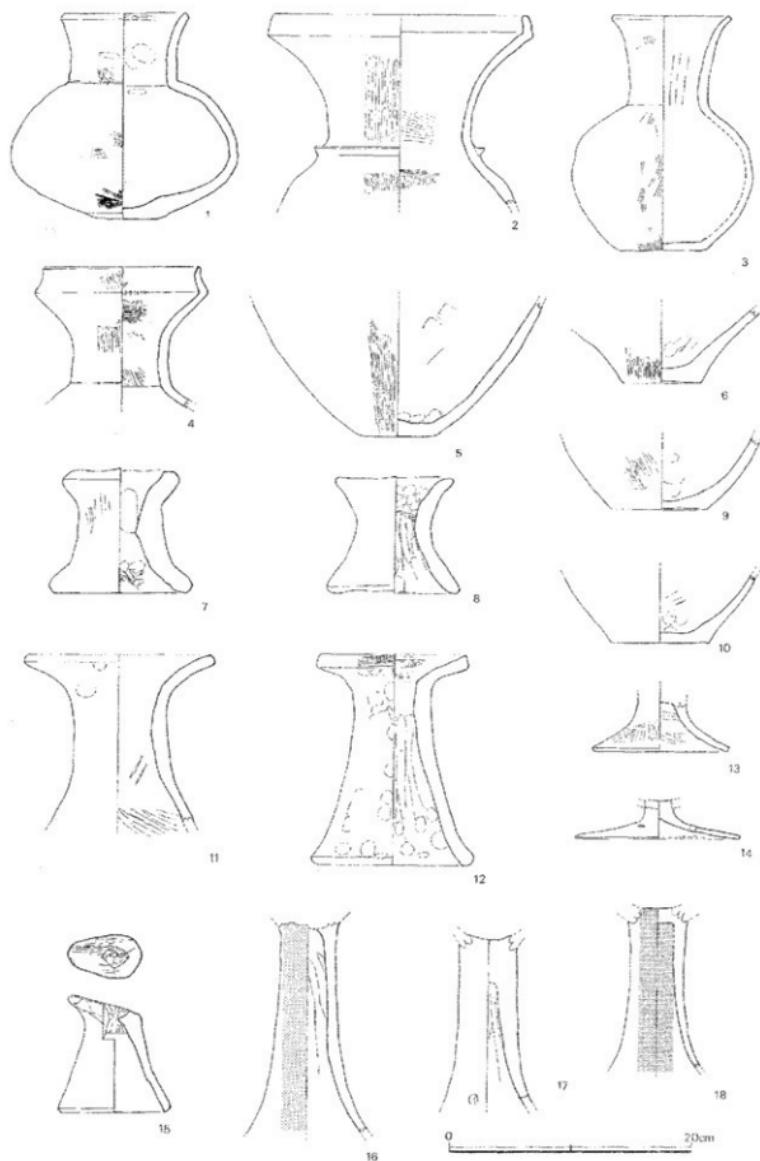
第14図 SD 5 - I 層出土土器④ (S=1/4)

ている。

第14図1は平底の底部から直線的にたちあがり、胴部上半に最大径を持つ壺である。胴部から底部にかけて次第に厚みを増し底部は分厚い。胴部外面はハケメを丁寧にナデ消し、内面も丁寧なナデ調整である。2は短頸壺で、下膨れ気味の胴部に短く立ち上がる口縁部を持つ。外面は細かいハケメを丁寧にナデ消している。底部は平底であるが、胴部との接線は不明瞭である。3は鉢である。胴部上半に最大径を持ち、頸部でいったんくびれた後やや外反気味に口縁部が低くたちあがる。口縁端部は軽くなれて面取りしているが、中央は沈線状にくぼむ。胎土には石英・長石を含む。4は大型の鉢で、口縁部と胴部の境に三角突帯を有する。底部外側は丸みを帯び、胴部上半からいったんくびれた後、やや外反気味に口縁部がたちあがる。口縁端部は平坦におさめ、器面は内外面ともに細かなハケメを軽くナデ消す。5は頸部のくびれがなくなり、胴部上半がまっすぐに立ち上がって外反する口縁につながる。底部は丸底である。胎土に粒の粗い石英を多く含む。6は小型の鉢で、尖り気味の底部からたちあがり、口縁部が若干すばまる。外面は荒いハケメを丁寧にナデ消し内面は丁寧なナデ調整で指頭圧痕も残る。7は丸底に近い小型の短頸壺で、胴部上半に最大径を有し頸部から口縁部にかけて緩やかに直立する。石英・長石のほか金雲母を胎土に含む。8は中型の壺で、頸部以上を欠く。径の小さな平底から丸みを帯びてたちあがり、胴部上半に最大径を有する。外面は縱方向の丁寧なヘラミガキの後、全体に黒塗りの痕跡残す。底部に近い部分に焼成後の意図的な穿孔が外面からなされている。胎土に金雲母を含む。9は小型の鉢か。薄い平底から胴部がほぼ直立気味にたちあがる。内外面ともに丁寧なナデ調整である。10は小型の短頸壺で、平底の底部から緩やかにたちあがり、胴部上半からくびれ、短い口縁部が直立気味にたちあがる。口縁端部はつまみ上げており先細りとなる。外面全体に指頭圧痕が残り、ミニチュア土器の可能性もある。

11・13は丹塗磨研壺の口縁部である。11は袋状口縁で、口縁端部を丸く収め袋部内面にはわずかに稜ができる。外面には丹塗りの痕跡がわずかに残り、口縁直下にM字突帯が1条付される。13は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し口縁端部には浅い沈線がめぐる。口縁直下にM字突帯がめぐり、内外面ともに丹塗りの痕跡が確認できる。12は小さめの底部から直線的に斜めにたちあがる小型の鉢である。底部と胴部の境目は若干くびれ、円盤底風の作りになる。内外面ともに丁寧なナデ調整である。なお、口縁端部には焼成後に意図的に打ち欠いた欠損が認められる。

第15図1は壺である。胴部下半に最大径を持ち底部は平底。頸部は直立気味にたちあがり、口縁部で緩やかに外反する。表面はハケメを丁寧にナデ消し、頸部内面には指頭圧痕を残す。石英・長石を含み、焼成は良好である。2は袋状口縁の壺で頸部以下を欠損する。頸部は胴部からラッパ状に開き、口縁は直立気味にたちあがる。口縁端部は丸みを帯び、頸部の付け根には先細りの三角突帯をつける。内面は丁寧なナデ調整で、外面はハケメをナデ消している。胎土に金雲母を含む。3は長頸壺である。球胴状の胴部に幅広の平底がつく。頸部の付け根はよくしまり口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁部は丸みを帯び、端部はやや尖り気味である。外面はハケメを丁寧にナデ消し、頸部内面はナデ調整であるがシボリ痕がわずかに残る。胎土に金雲母を含む。4は二重口縁壺の口縁部である。



第15図 SD 5—I層出土土器⑤ (S=1/4)

胴部からラッパ状にたちあがり、内側にくの字に折れ曲がった後、口縁端部にかけて外反気味にたちあがる。縁部は丸く收めている。頸部外面は縦方向のヘラミガキで調整し、内面には横方向のハケメの痕跡を残す。胎土に金雲母を含む。

5・6・9・10は壺の底部である。5は大型の壺の底部で、底部外面は平底であるが、やや凹凸がある。外面には縦方向のハケメを残し、内面は底部付近を中心に指頭圧痕や指ナデの痕跡を明瞭に残す。胎土に金雲母を残す。6は、底部から大きく外反してたちあがる壺の底部である。底部外面はやや上げ底で、厚さは薄い。外面は細かい縦方向のハケメを丁寧にナデ消した後、丹塗りが施される。胎土はきめが細かくよく精選されており、わずかに金雲母を含む。9は、やや上げ底で、胴部は内傾気味にたちあがっている。底部は薄く仕上げる。胎土には金雲母を含む。10は平底で径も大きい。薄手で内面には指押さえによる調整痕が明瞭に残る。

7・8・11・12・15は器台である。7は全体的に厚手で、胎土には大粒の石英・長石のほか金雲母も混じる。内傾する短い胴部に、小さく外反する口縁部・脚部がつく。胴部内面には縦方向の指ナデ痕が明瞭で、中央部には稜線がつく。外面はハケメを丁寧にナデ消している。8はほぼ完形の小型器台である。器形は中央でくびれる鼓型で、口縁径よりも底部径の方がわずかに大きい。表面は丁寧なナデ調整、内面はナデ・指押さえによる調整が顕著であるが、くびれ部分の内面にはシボリ痕が観察される。胎土には大粒の石英を含む。11は受け部がラッパ状に大きく聞くタイプで、全体的に薄手に仕上げる。内面はなだらかな曲線を帯びており、段は有さない。内外面ともに丁寧なナデ整であるが、内面にはわずかにヘラミガキの痕跡が残る。胎土には石英を多く含む。12は口縁部を一部欠損するものの、ほぼ完形の器台である。脚部据から内傾しながら直線的にたちあがり、受け部が外側に大きく屈曲する。受け部内面には脚部との境に明瞭な稜を有する。内外面ともにナデ調整で、指頭圧痕も残る。特に内面には、シボリ痕のナデ消しを意図した縦方向のナデの痕跡が明瞭に残る。受け部端部は平坦面を有し、横方向のハケメを軽くナデ消している。胎土は石英粒子を含むものの比較的精選されており、金雲母も混じる。15は完形の小型器台である。受け部は傾斜して一端が外に突出している。内外面ともに丁寧なナデ調整であるが、受け部には細かいハケメの痕跡を残す。また、受け部にはヘラ状工具による焼成前の穿孔の痕跡をそのまま残し、脚部まで貫通している。胎土には金雲母を含む。

13・14は、いずれも台付き鉢の脚部と考えられる資料である。13は、鉢との接合面で欠損した資料で、脚部据にかけてラッパ状に大きく外反する。脚部据端部は面取りされて平坦である。外面は縦方向のハケメを軽くナデ消し、内面も丁寧になでている。胎土には石英・長石を含む。14は低脚で上端には鉢の底部内面を残す。3カ所の円形の透かしを持つ。内外面ともに丁寧なナデ調整であるが、内面にはハケメをナデ消している。胎土には金雲母を含む。古墳時代前期初頭の資料である。

15~18は、高坏の脚部である。15は長脚で、外面には丁寧なナデ調整の後、丹塗りの痕跡が残る。内面にはシボリ痕が明瞭に残る。胎土には、石英・長石が混じる。17は坏部内面を上端に残し、脚部据にかけてなめらかな曲線を描いてラッパ状に聞く。3カ所の透かしの痕跡がのこり、坏底部は非常に厚みがある。外面は丁寧なナデ調整で、内面にはシボリ痕が明瞭に残る。色調は浅黄澄色で胎土に

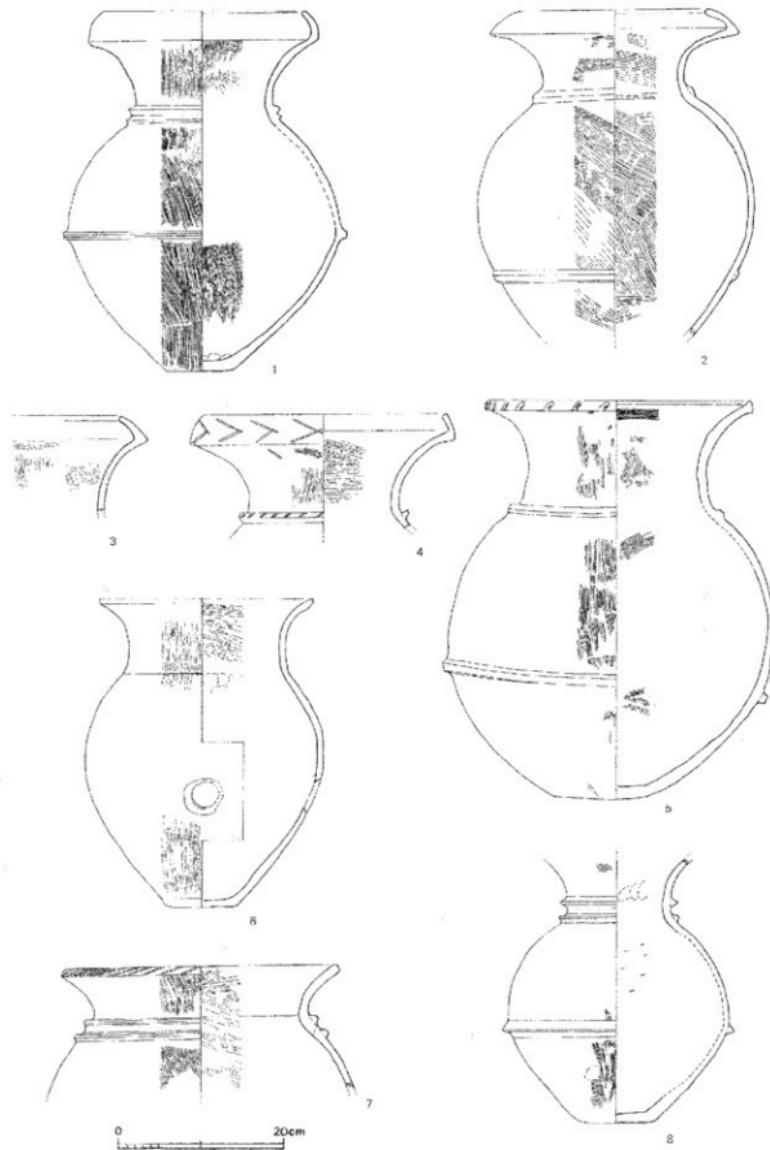
は金雲母がわずかに混じる。18は非常に薄手に仕上げており、内外面ともに丁寧なナデ調整で、内面のシボリ痕もきれいにナデ消されている。胎土は非常にきめが細かく、大量の金雲母を含む。内外面ともに黒塗りの痕跡がわずかに残る。いずれも弥生時代中期後葉の資料である。

第16図～第17図には、大型の壺・甕類をまとめた。SD5 1層からは人骨と思われる資料も出土しており、これら大型の壺・甕類は壠棺として利用されていた可能性が高い。

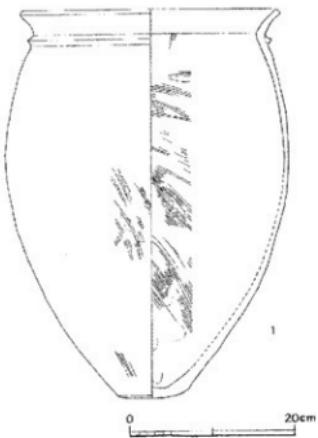
第16図1～4は袋状口縁の壺である。1はほぼ完形の資料で、平底の底部から球胸状にたちあがり、頸部がラッパ状に外反した後、口縁部は丸みを帯びて内傾する。口縁部と頸部の境には棱を持つが、内面はやや丸みを帯びる。頸部と胴部の境には先細りの三角突帯を2条有し、胴部中央の最大径を持つ部分にも台形の突帯が1条施される。胴部外面には綫方向・斜め方向のハケメをそのまま残し、頭部はそれをナデ消している。胎土には金雲母を含む。2も袋状口縁を持つ壺であるが、頸部の外反がきつく口縁部もきつく内傾する。頸部の付け根には丸みを帯びたカマボコ形の突帯が1条はしり、胴部下半部にも台形状の突帯が1条ずつ。外面はハケメの後軽いナデ調整で内面も同様であるが、胴部にはハケメの痕跡が明瞭に残る。色調は橙色で胎土には金雲母を含む。3・4は口縁部のみの資料である。3はラッパ状に聞く頸部から口縁部が内傾するが、口縁部の丸みが弱くなり直線状に近い。口縁端部は面取りされて平坦で、内外面ともにハケメをナデ消す丁寧なナデ調整が施される。胎土にはわずかに金雲母を含む。4も袋状口縁であるが、口縁部のたちあがりがより直立に近くなる。口縁部外面には綫状の沈線が施され、頸部の付け根をめぐる突帯にも斜めの刻みがつく。内外面ともにハケメを丁寧にナデ消している。胎土には金雲母がわずかに混じる。5・6は広口壺である。5は球胸状の胴部から口縁部がラッパ状に大きく聞く。底部は平底である。頸部の付け根と胴部のやや下よりも台形状の突帯が1条ずつ。口縁端部は平坦で斜め方向の刻みを持つ。内外面ともにハケメの後ナデ調整で、胎土には石英・長石のほか金雲母を含む。6は胴張りで頸部付け根のしまりも弱い。口縁端部は程く面取りされ、外面から頸部内面にかけてはハケメの後になでているが、胴部内面は丁寧なナデ調整である。胴部には内面からの打ち欠きによる意図的な穿孔が認められる。胎土には石英・長石を含む。

7は口縁部が「く」の字に外反する壺の口縁部である。口縁端部は平坦におさめ斜沈線を施す。頸部の付け根には台形状の2条の突帯がめぐる。外面には綫方向のハケメを残し、内面はハケメをナデ消すが、部分的に接合痕および指痕圧痕を残す。胎土には金雲母を含む。8は口縁部を欠くが、広口壺と考えられる。底部は平底であるが胴部との境は丸みを帯び、胴部は球胸状を呈す。胴部最大径付近と頸部の付け根にそれぞれ1条・2条の三角突帯が付き、頸部付け根の2条については上端が面取りされる。内面は丁寧なナデ調整で、外面はハケメを丁寧にナデ消す。胎土には石英・長石を含む。

第17図1は、「く」の字形口縁壺である。底部は凸レンズ状で、口縁部のたちあがりも比較的きつい。口縁部の付け根には三角突帯を1条有し、内外面ともにハケメの後ナデ調整を施す。胎土には石英・長石を含む。これら壠棺に転用されたと思われる資料群は、おおむね弥生時代後期中葉～後葉の土器群である。また、SD5 1層で検出された土器群は中期中葉～古墳時代前期までの資料を含むが、



第16図 SD 5 - I 層出土土器⑥ (S = 1/6)



第17図 SD 5 - I 層出土土器⑦ (S=1/6)  
底には金雲母を含み精緻である。いずれも中期後葉～後期初頭の土器であり、特に2の長形  
壺は肥後地域との関連が考えられる。

### ③SD 5 III層出土上器

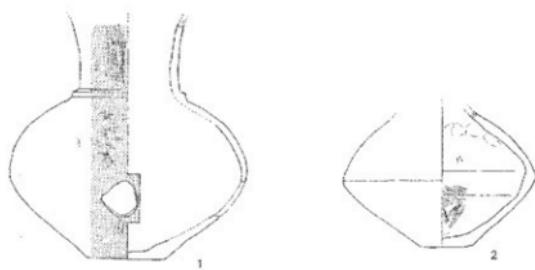
SD 5 III層は、前述のとおり、SD 5 の東に隣接する褐色土中から出土したものである。この部分は面的な掘り下げをおこなっておらず、地表およびSD 5 I・II層掘り下げ終了時の東側掘方に露頭した土器を探集したにすぎない。そのうち図化できた15点を第19図に掲載した(第19図)。第19図1は壺の口縁部で、口縁部上面が平坦であるが、胴部との境が丸みを帯びる資料である。口縁直下の胴部には浅い沈線上の段がついている。内外面ともにナデ調整であるが、内面の口縁部付近には綫方向の指押さえの痕跡を残す。色調は灰白色で、胎土には金雲母を多く含む。板付Ⅱ式の影響が残る弥生時代中期初頭の土器であろう。2・4・6は口縁部がやや内傾する壺である。2・4はともに口縁部内面がわずかに突出する。11縁部は厚みがあり口縁部の付け根から端部にかけて徐々に細くなる。4には口縁部下に1条の三角突帯を有する。ともに内外面ともに丁寧なナデ調整である。いずれも胎土に金雲母を含む。6も口縁部が内傾する土器であるが、口縁部内面の突出は認められない。口縁部の厚みは一様で端部は丸みを帯びる。胎土に金雲母を含む。3・5・7・9~11は鉢先状口縁の壺である。3・5・7は口縁部付け根が厚く、端部にかけて徐々に細くなる。いずれも口縁部内面がわずかに突出し、内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。また口縁下の胴部には、いずれもシャープな三角突帯が付される。3・5については、胴部の器壁を薄く仕上げている。いずれも胎土に石英・長石のほか金雲母を含む。8は口縁部の厚みが一様な壺で、全体的に薄手に仕上げる。胎土に金雲母を含む。9・10は口縁端部が若干肥厚する上器である。口縁部内面はいずれも突出する。10には口縁部下に

弥生時代後期中葉～後葉の資料が圧倒的に多く、中期の資料については後述するIII層からの混入である可能性が高い。

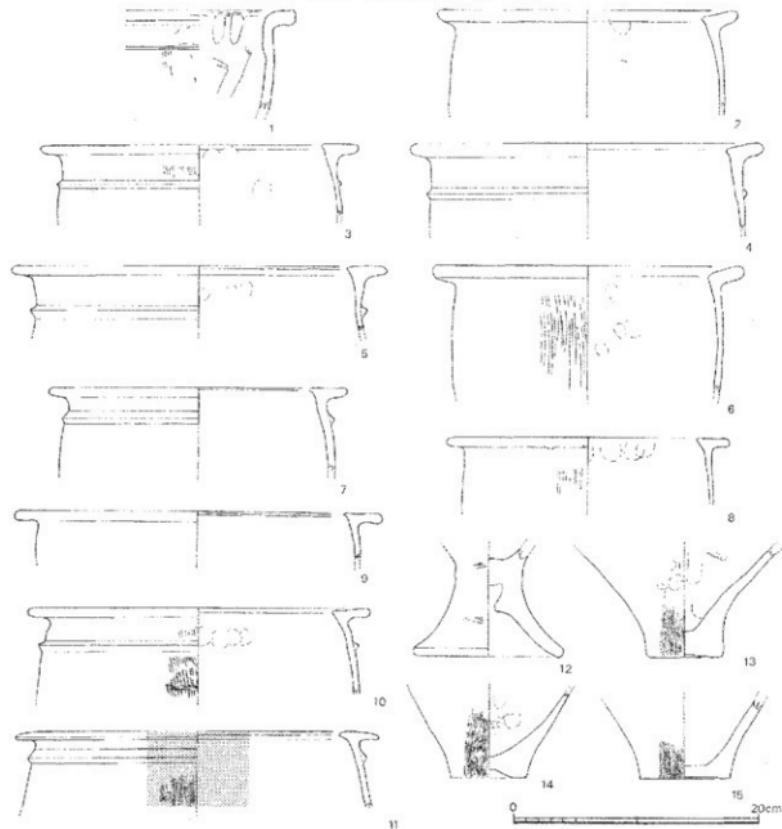
### ②SD 5 II層出土上器

II層の土器は非常に少なく、図化できたのは2点のみである。第18図1は丹塗磨研の壺でよく張った胴部に直立気味にたちあがる頸部がつく。よくしまった頸部の付け根には、1条の三角突帯が施される。丹塗の痕跡は全面に残るが、頸部は綫方向の細かいハケメの痕跡が残る。また、胴部下半には、外側からの意図的な穿孔が認められる。胎土はきめが細かく緻密である。2はソロバン玉状を呈し、長形壺の胴部と考えられる。胴部の肩曲部には明瞭な棱を有し、平底の底部の径も小さい。外側は全体に丁寧なナデが施されるが、内面

にはハケメがのこり、胴部上半には指おさえの痕跡を



第18図 SD 5-II層出土土器 (S=1/4)



第19図 SD 5-III層出土土器 (S=1/4)

シャープな三角突帯が1条付される。ともに内外面は丁寧なナデ調整であるが、10の外面にはハケメが残る。9が灰白色、10が橙色で両者とも胎土に金雲母を含む。11は口縁部が外傾する薄手の土器である。口縁部内面が大きく張り出し、口縁部下には三角突帯がつく。内外面ともに丹塗の痕跡が残る。胎土は非常に緻密で金雲母を含む。

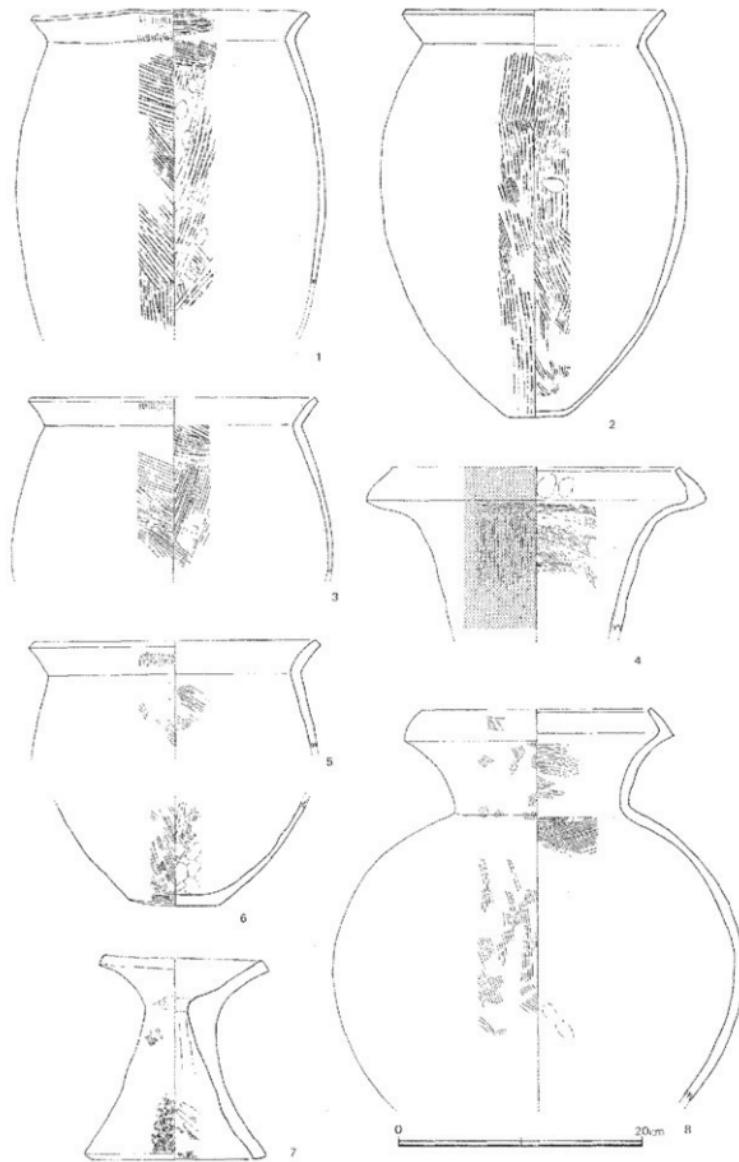
12~15は底部および脚部である。12は高坏の口縁部か。低脚で上面には坏部の底部内面が残る。整形の際に、坏の底面と脚部内面との間に空間を設け、焼成前に脚部内面よりこの空間に向かって穿孔がおこなわれている。祭祀に用いられた土器か。比較的厚手で胎土には金雲母を含む。13は壺の底部としたが、壺の可能性もある。やや上げ底気味の底部からいったん直立してたらあがり、緩やかに外反する。底部は非常に厚みがある。内外面ともにナデ調整であるが、外面には細かいハケメの痕跡を残す。胎土に金雲母を含む。14・15は壺の底部である。14は上げ底であるが厚みはない。外面には細かなハケメの痕跡を残し内面はなでている。底部外面には粘土を拭き取った痕跡がそのまま残る。胴部の器壁は薄く、胎土には金雲母を含む。15は平底に近い資料である。外面に細かいハケメを残し胎土に金雲母を含む。

以上、SD 5Ⅲ層出土土器は、弥生時代中期前葉～後葉にかけての土器群である。

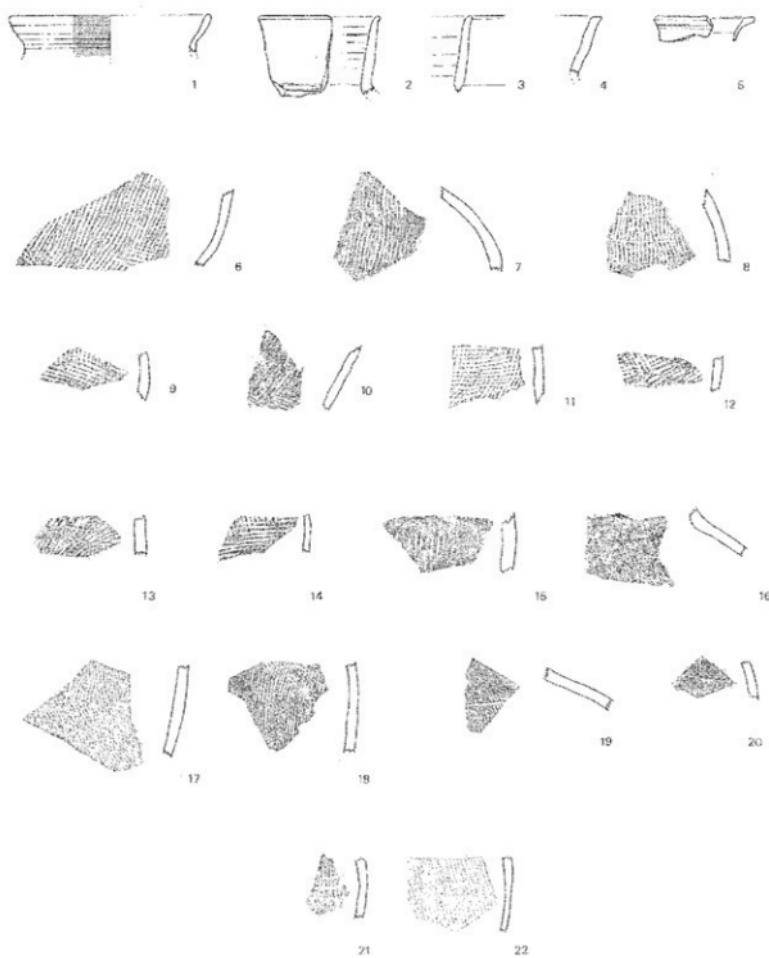
#### ④ SD 6 出土土器

SD 6からは、南区断ち割り部分を中心に、土器がまとまって出土している。土器が集中する層は、SD 6 南壁土層断面の8層・10層である（第6図）。

第20図1~3・5は「く」の字形口縁を持つ壺である。1は長胴で、口縁のたちあがりはきつい。口縁端部は平坦で、内外面ともにハケメの痕跡を残す。胎土には金雲母を含む。2は底部まで残存する資料である。底部外面はわずかに突出し胴部との境も丸みを帯びる。胴部はやや張り気味である。内外面ともにハケメが残る。胎土には金雲母を含む。3は長胴の壺の口縁部で、口縁部のたちあがりはきつく、端部は面取りされて平坦である。胴部は内外面ともにハケメの後ナデ消す。胴部以下は薄手に仕上げる。胎土には金雲母を含む。5も3と同様の土器であるが、やや厚みがある。内外面ともに丁寧なナデ調整で、胎土には金雲母が混じる。6は壺の底部である。底部外面がわずかに突出するが、胴部との境は比較的しっかりとした稜がつく。胴部は薄手に仕上げており、内外面ともにハケメをナデ消すが、底部内面には指ナデの痕跡が残る。胎土に金雲母を含む。4・8は袋状口縁の壺である。4は頸部がラッパ状に大きく外反し、口縁部は内傾する。口縁端部は平坦で、わずかに外反気味である。外面にはハケメをナデ消した後、丹塗の痕跡がわずかに残る。内面はハケメの後ナデ調整。胎土には金雲母を含む。8は球胴状の胴部を持ち、頸部がラッパ状に短くたちあがり、口縁部が内傾する。内外面ともにハケメをナデ消している。胎土は比較的緻密で、金雲母をわずかに含む。7は器台である。長い脚部に大きく外反する受け部がつく。受け部中央には、脚部に向けて穿孔した痕跡が残る。内外面ともにハケメの後、縦方向の丁寧なナデ調整によって仕上げる。胎土には金雲母を含む。1・2・4・7は南区断ち割り部10層出土、3・6・8は同じく8層出土、5は北区断ち割り部出土である。これらは弥生時代後期中葉～後葉の土器群である。



第20図 SD 6 出土土器 (S=1/4)



0 10cm

第21図 朝鮮半島系土器 (S=1/3)

##### ⑤朝鮮半島系土器

今回出土した朝鮮半島系土器は、樂浪系瓦質土器（第21図1～16）・三韓系瓦質土器（第21図17～20）・陶質土器（第21図21・22）である。これらはほとんどが二次堆積上である7層からの出土で、小片が多いことから箇瀬に説明する。

1は北区S D 6からの出土で、広口壺（罐）の口縁部である。口縁部下がわずかにくびれ、内外面ともに轉轆による回転ナデ調整がおこなわれている。胎土は緻密で外面には黒塗りの痕跡残る。2～4も広口壺の口縁部破片である。轉轆による回転ナデの痕跡を残し、表面は平滑である。5は鉢の口縁部で、口縁部上面は面取りされている。6～22は胴部片で、すべての個体に縦目叩きが残る。8・9・19～21には横位の沈線がはしり、壺の胴部に相当するものと思われる。16は摩滅が著しいが上端がわずかに立ち上がっており、壺の頭部付近になるであろう。これらの胴部片については、6がS D 5 T層出土のほかはすべて7層からの出土である。

## 2. 石器

本調査区出土の石器類は、SD5・SD6といった弥生時代の遺構からの出土はほとんどなく、大半は縄群・7層といった後世の客土中からの出土が大半を占める。特に、縄群中からは、時期は特定できないものの大量の磨石・敲石・凹石が出土している。本報告で取り上げる資料は、旧石器時代～弥生時代の石器類34点である。

### 【旧石器時代の石器】(第22図)

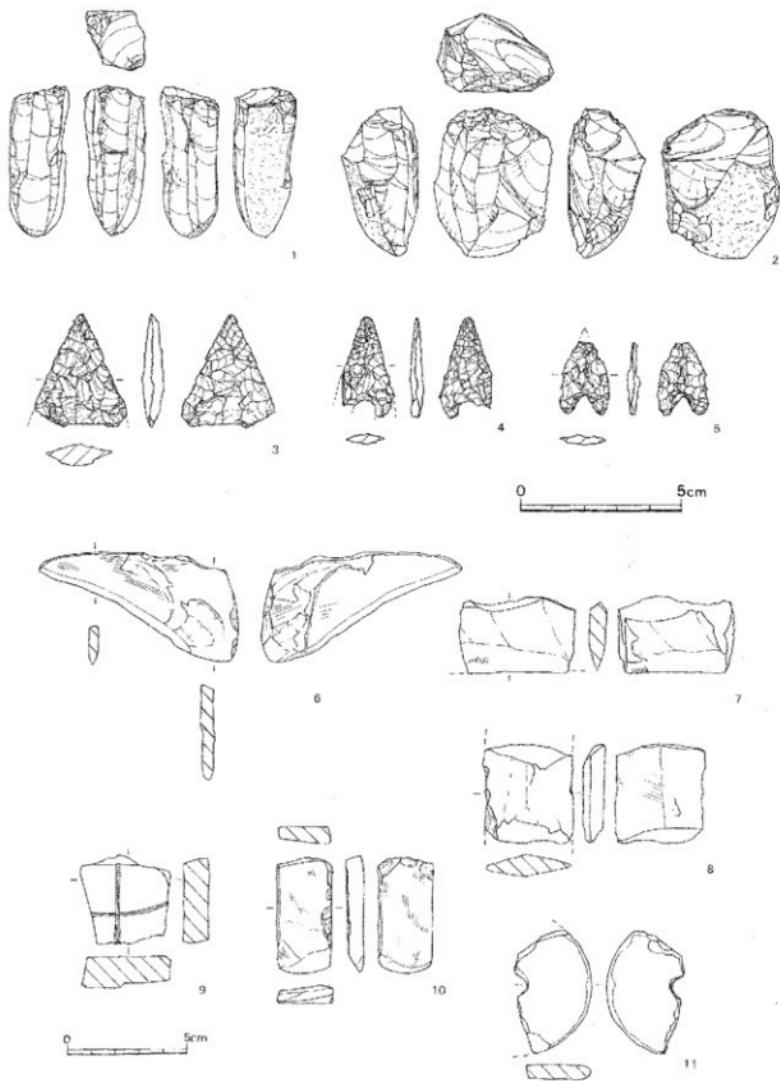
第21図1は、細石刃核である。方柱状に近い形状で、礫面を残しつつ3面に作業面が確認できる。打面は基本的に1枚の剥離面で、打面調整はほとんど行われていない。比較的長い細石刃を剥離した痕跡がうかがえる。2は石核である。礫面を残しつつ大きな剥離面で打面を形成し、綫長や寸詰まりの薄片をとっている。打面の転移は認められず、作業面も正面から側面にかけてほぼ一定している。2については、台形石器の素材となる剥片を生産した可能性が考えられる。

### 【弥生時代の石器・石製品】(第22図～第26図)

第22図3～5は石鎚である。3は大型の石鎚で両脚をやや欠損する。基部はややくぼむ凹基鎚で、両側縁や基部から丁寧な平坦剥離を施し、体部全面に剥離痕が及ぶ。4は、脚部を欠損するものの、抉りの深い凹基鎚である。調整は体部中央に向かって細く平坦な剥離を丁寧に施しており、横断面はレンズ状を呈する。5は、基部がV字状に凹む凹基鎚である。先端部をわずかに欠損しており、両側縁は緩やかに外湾している。調整は3・4に比べて荒く、比較的大きな調整剥離によって薄手に仕上げている。3・4は不純物の少ない漆黒色の黒曜石を、5はややすくすんだ黒色の黒曜石をそれぞれ用いている。なお、石鎚の形態や調整方法等から、縄文時代の石鎚である可能性も考えられる。

6・7は、磨製石鎌である。6は、節理の発達した黒色頁岩の板状素材を研磨して仕上げている。類繁な研ぎ直しにより刃部がかなり短く、着柄すると柄に対して鈍角となる。7は刃部のみ残存している。刃部の研磨は丁寧である。8は磨製石剣の一部である。凝灰質頁岩製で研磨により表裏両面の体部中央に鏽をつくり、断面菱形になるように仕上げている。9は砥石である。きめの細かい砂岩製で、表裏両面に研磨面が形成されている。表面の研磨面には、筋状の研磨痕が十字に交差している。10は扁平片刃石斧である。珪質頁岩の板状素材を用い、周辺に調整剥離の痕跡をとどめている。刃部は表裏両面から研ぎ出されているものの、片側に大きく偏っている。11は玄武岩製の紡錘車である。半分は欠損しているが全面に丁寧な研磨が施されている。

第23図には石斧類を集成した。1は、板状の黒色頁岩を素材とした片刃石斧である。表裏両面には素材面を残し、基部から側縁中央部にかけては礫面を残す。基部には両側縁から剥離が施され、着柄を意図した緩やかな凹部が作り出されている。研磨は刃部とその周辺に限られており、特に刃部には表裏両面から入念な研磨が施されている。2は磨製石斧の欠損品である。体部全面にわたって敲打および研磨が施され、横断面楕円形の両刃石斧に仕上げている。体部右側縁や裏面が大きく欠損しているが、欠損後も刃部再生の調整剥離が施されている。3・4は磨製石斧の未製品と考えられる資料で



第22図 石器・石製品① (S=2/3, 1/2)



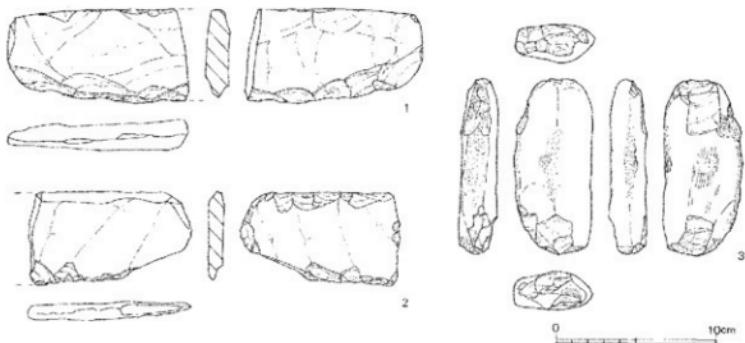
第23図 石器・石製品(2) ( $S=1/3$ )

ある。3は、敲石との見方もできるが、厚手の伐採斧の製作を意図した石斧未製品としてあつかった。棒状の礫を素材とし、体部中央を中心剥離と敲打によって減厚調整が行われている。また、上下両端には平坦な剥離痕が認められ、刃部の形成を意図したものと推測される。4は扁平石斧の未製品である。安山岩の板状素材を用い、周辺から粗い調整剥離を施した後、体部全面に敲打を加えて稜をつぶし、刃部から体部にかけて研磨を施している。裏面には調整剥離が残っており、刃部の形成も不十分である。5・6は太型船形石斧の欠損品である。5は、刃部のみの資料で、刃部から側縁にかけて入念な研磨を施して、厚手の両刃を作り出している。側縁は研磨によりやや面取りされている。刃部や側縁の他は研磨は施されず、細かい敲打痕が残っている。6は、基部付近の資料である。体部全面にわたって敲打痕が残り、体部中央や側縁部を中心に研磨が施されている。裏面には、欠損後の調整剥離が施されている。

第24図1・2は、磨製石鎌の未製品と考えられる資料である。1は先端部付近の資料である。安山岩製で、板状素材を用いて表裏両面から調整剥離を施し、直線的な刃部を作り出している。2は、基部付近の資料である。黒色泥岩の板状素材を用いており、表裏両面から調整剥離により直線的な刃部を作り出すとともに、背部にも剥離を施している。着柄部分は未加工である。3は敲石としたが、上下両端の剥離痕のほか、体部中央には敲打痕や研磨痕も認められ、石斧等何らかの製品を意図した未製品の可能性も考えられる。

第25図～第26図は、敲石・磨石・凹石を集めた。第24図1は、扁平な円礫の表面に敲打面を設けたものである。下端部にも敲打面が認められる。2は表裏両面の体部中央と下端部に敲打面を設けるが、体部中央には磨面が広がっている。3は磨石で、表裏両面と両側縁に磨面が認められる。また、磨面には浅い敲打痕も確認できる。4は凹石に磨面が付加された資料である。表裏両面の中央に、敲打による凹部がつくられ、裏面や側縁部分には磨面が広がる。磨面には、浅い敲打痕が残っている。5は磨石である。表裏両面に磨面が広がり右側縁には敲打痕が残る。6は凹石である。表裏両面に敲打による浅い凹部がつくられ、両側縁から体部上面にかけて磨面が広がっている。7は凹石であるが、表裏両面や両側縁には磨面も認められる。凹部は摩滅により形成されたものである。8は敲石で、表裏両面に敲打面が広がるが、側縁部の広い範囲にわたって磨面も認められる。

第26図1は、磨石である。表裏両面に磨面が広がるが同時に敲打痕も残されている。また、体部の周囲にも磨面が形成されている。2は、砾器とした。円礫の一辺に、表面を中心に調整剥離を施し、直線的な刃部を作り出している。3は表面に磨面、裏面には敲打面が形成された資料である。体部の周囲には、磨面・敲打面が広がっている。表面の磨面は非常に平坦で、礫面との境界は明確な稜線で区別される。4は敲石である。扁平な棒状の礫を用いて表裏両面に敲打痕が集中する。側面には敲打面・摩耗面が形成されており、特に右側縁部は面取り状となる。握りやすさを追求したものか。5は、石皿である。扁平で縦長の礫の表面に磨面が形成され、緩やかに凹んでいる。磨面は上下端にかけて緩やかに傾斜しており、下端部が強き出し口になるものと思われる。6は凹石であるが、扁平で比較的大型であることから、台石の可能性も考えられる。表裏両面に摩耗による凹部がつくられ、側縁部



第24図 石器・石製品③ (S=1/3)

には磨面が広がっている。

### 3. 土製品

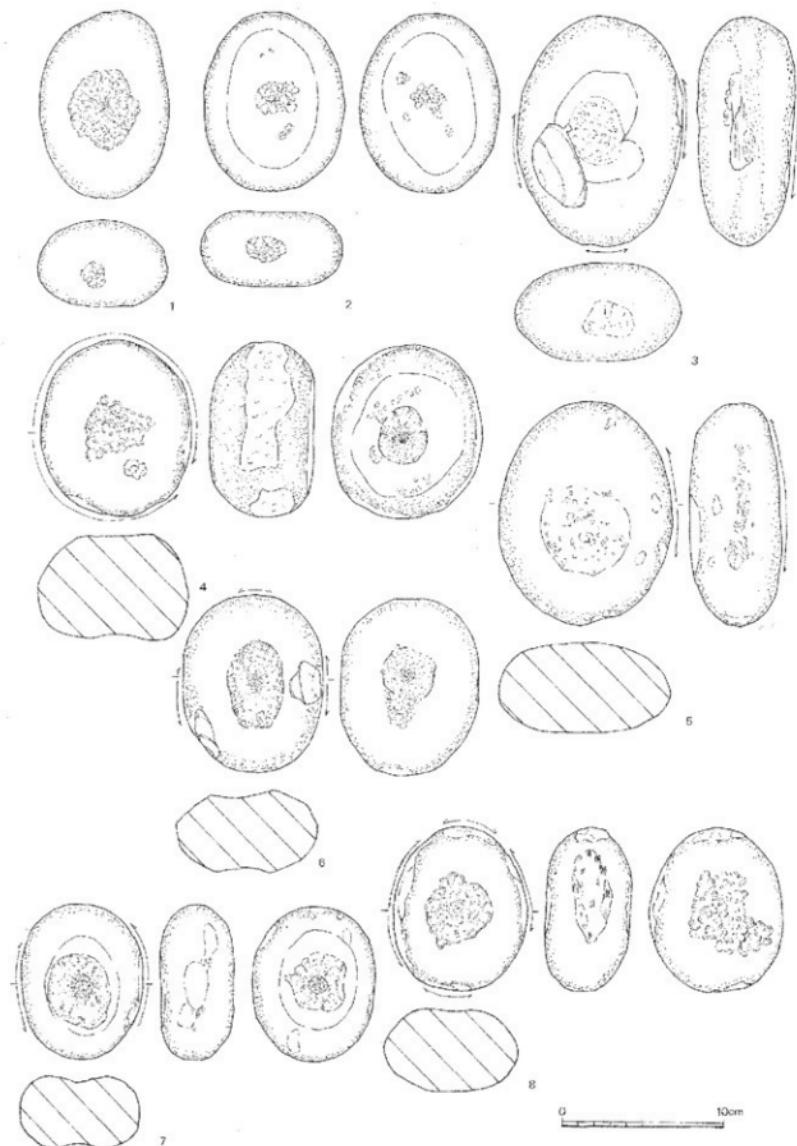
第27図1は、土製円盤である。丹塗り磨研土器の破片を用いたもので、周囲には形状を整えるために粗く打ち欠いた痕跡が残されている。

### 4. 骨角製品

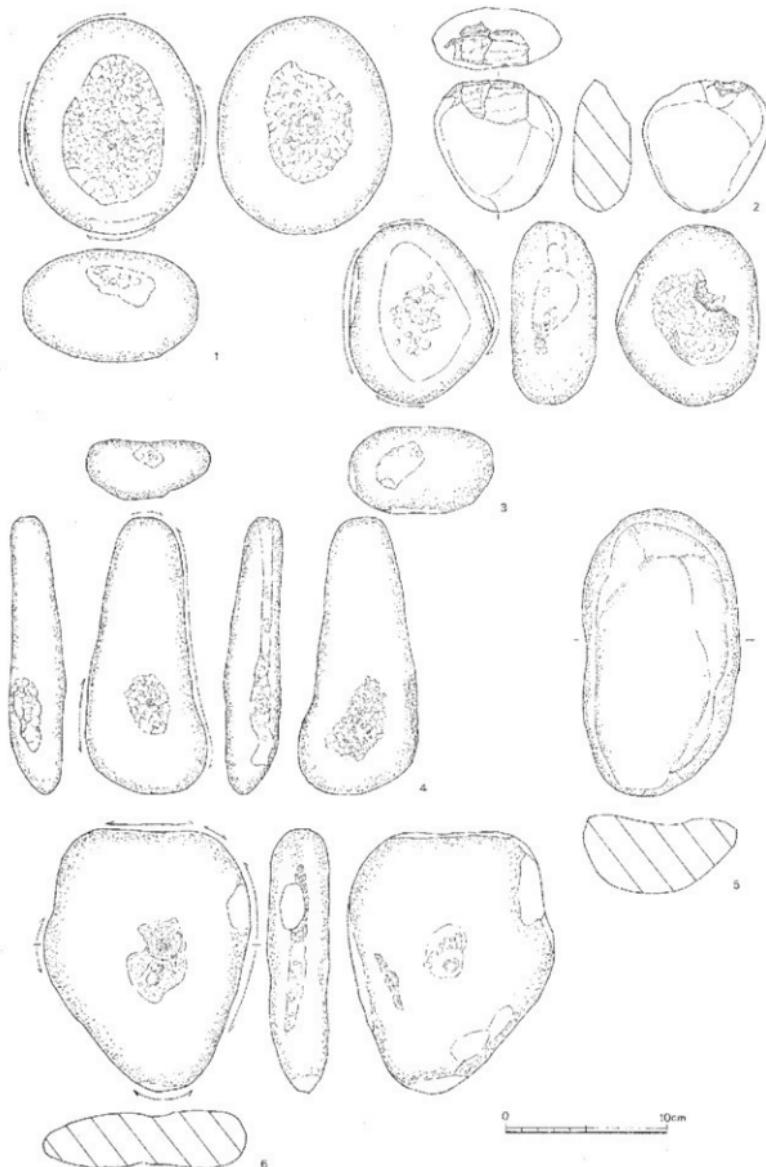
第27図2は、骨製刺突具である。シカもしくはイノシシの四肢骨を半裁し、全面を研磨して鋭利に仕上げる。裏面には脛孔の痕跡がわずかに残っている。3は、鯨骨製のアワビオコシである。先端部のみ残存し、先端部は鈍く丸みを帯びている。表面および側面には、盤状工具による加工痕が残る。裏面は丁寧な研磨が施されており、側縁から体部中央にかけて緩やかに内湾している。

### 5. ガラス製品

第28図1～4は、小玉である。1は淡い青緑色で径約1mmの穿孔が施される。表裏両面には、研磨により面取りがなされている。2も淡い青緑色で、径約1mmの穿孔が施される。3は緑色で厚みがあり、穿孔も1mm未満で大きさの割に孔は小さい。4は青緑色で、径約1mmの穿孔が斜位に施されている。



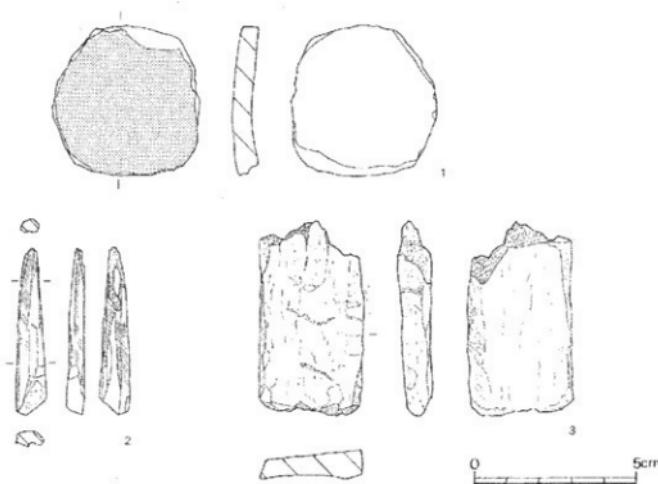
第25図 石器・石製品④ (S=1/3)



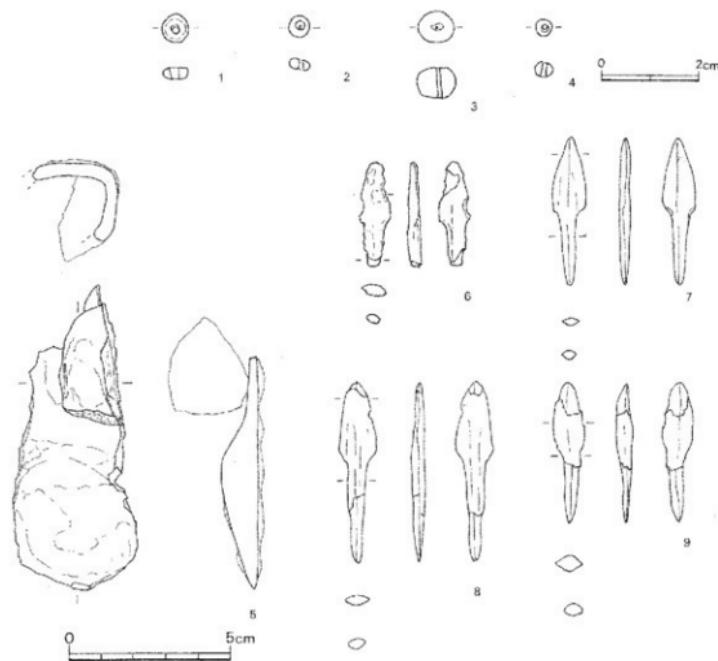
第26図 石器・石製品⑤ (S=1/3)

#### 6. 金属製品

第28図5は、鍛造の袋状鉄斧である。板状の素材から体部上半を敲いてのばし、折り曲げて着柄部としている。着柄部は左半分が欠損している。刃部は片刃に仕上げられており、手斧の先端部として利用されたようである。6～9は銅鑓である。6は鈎化が進行しているが、先端部と基部のくびれがわずかに観察される。7は鎌が先端部から身部にかけて走り、断面レンズ状を呈する。8は比較的明瞭で、穎やかにくびれている。9は7と同じタイプの銅鑓で、鎌がわずかに観察される。9は柳葉状を呈し、身部と先端部の区別が不明瞭である。体部中央に鎌があり、断面が菱形に近い形状となっている。



第27図 土製品・骨角製品 ( $S=2/3$ )



第28図 ガラス製品・金属製品 (S=1/1, 2/3)

第1表 観察表

## 石器観察表

団面番号	遺物名	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損の有無
1	細石刃核	26区7層	黒曜石	4.7	1.9	1.8	21.2	
2	石核	25区7層	黒曜石	4.6	3.7	2.4	38.8	
3	石核	表採	黒曜石	3.5	2.9	0.65	4.2	両脚欠損
4	石礫	20区7層	黒曜石	3.1	1.6	0.4	1.6	両脚欠損
5	石礫	19区7層	黒曜石	2.25	1.55	0.4	0.98	先端部欠損
6	磨製石鏃	25区SD5上層	黒色頁岩	8.25	4.55	0.4	21.78	
7	磨製石鏃	26区7層	玄武岩	3.15	4.8	0.7	17.98	刃部のみ残存
8	磨製石剣	南区7層	轟灰質頁岩	4	3.7	0.9	18.1	先端部・基部欠損
9	砥石	26区7層	砂岩	3.6	3.8	1.3	26.8	縁面部の一部残存
10	扁平片刃石斧	22区7層	珪質頁岩	4.7	2.3	0.75	14.3	
11	劔頭串	北区7層	玄武岩	5	3.2	0.6	12.2	半欠
1	磨製石斧	25区砾群	黒色頁岩	15.9	7.8	1.1	177.4	
2	磨製石斧	26区7層	玄武岩	12.7	5.3	4.2	392.5	先端部欠損
3	磨製石斧(未製品)	21区7層	安山岩	20.15	5.85	5.2	858.2	
4	磨製石斧(未製品)	21区7層	安山岩	17.1	5.9	2.75	385.7	
5	大型始刃石斧	26区7層	頁岩	7.75	3.25	3.5	69.5	先端部のみ残存
6	大型始刃石斧	26区7層	頁岩	19	5.45	3.15	245.4	基部欠損
1	石鍬	25区7層	安山岩	11.05	5.75	1.8	180.1	基部欠損
2	石鍬	13区7層	黑色泥岩	10	5.7	1	99.3	先端部欠損
3	石鍬	25区7層	玄武岩	10.8	4.85	2.3	200.1	
1	靴石	20区砾群	玄武岩	11.7	8	5.25	684.1	
2	靴石	20区砾群	玄武岩	11	8.7	4.7	758.8	
3	靴石	25区砾群	玄武岩	14.1	10.2	6	1340.5	表面一部剥落
4	凹石	25区砾群	玄武岩	10.2	9.4	6.55	1071.5	
5	磨石	25区SD5上層	玄武岩	13.7	10.7	5.8	1289.1	
6	凹石	25区砾群	玄武岩	10.9	8.7	5.4	280	表面一部剥落
7	凹石	29区砾群	玄武岩	9.55	7.2	4.6	543.3	
8	磨石	25区SD5上層	玄武岩	10	8.3	5.4	649	
1	磨石	27区砾群	玄武岩	13.2	10.7	6.65	1390	
2	磨石	27区砾群	玄武岩	8	7.85	3.6	306	
3	磨石	29区砾群	玄武岩	11	8.8	5.3	815.3	
4	磨石	20区砾群	玄武岩	16.85	7.5	3.5	539.9	
5	石頭	25区砾群	玄武岩	17.45	9.6	5	1206.9	
6	凹石	25区砾群	玄武岩	15.9	12.8	3.9	1211.5	

## 土製品観察表

団面番号	遺物名	出土地点	素材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損の有無
1	土製円錐	25区SD5上層	土塊片	4.65	4.55	0.8	18	

## 骨角器観察表

団面番号	遺物名	出土地点	素材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損の有無
2	刺突具	25区SD5上層	四肢骨	5.1	0.9	0.5	2.6	先端部付近残存
3	アワビコシ	25区SD5上層	鰓骨	5.9	3.25	1.05	15.1	先端部のみ残存

## ガラス製品観察表

団面番号	遺物名	出土地点	素材	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)
1	小玉	19区砾群	ガラス	0.58	0.51	0.28
2	小玉	19区7層	ガラス	0.45	0.42	0.25
3	小玉	19区7層	ガラス	0.79	0.65	0.62
4	小玉	11区7層	ガラス	0.38	0.35	0.3

## 金属製品観察表

団面番号	遺物名	出土地点	素材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損の有無
5	皮状鉄斧	26区7層	鉄	9.35	3.9	3.15	71.6	袋部半欠
6	鋼鐵	北区表様	青銅	3.2	1	0.45	2.3	周辺風化
7	銅劍	23区7層	青銅	4.5	1	0.3	4	
8	銅劍	28区7層	青銅	5.5	1.15	0.48	4.2	
9	銅劍	21区7層	青銅	4.3	1	0.5	2.9	

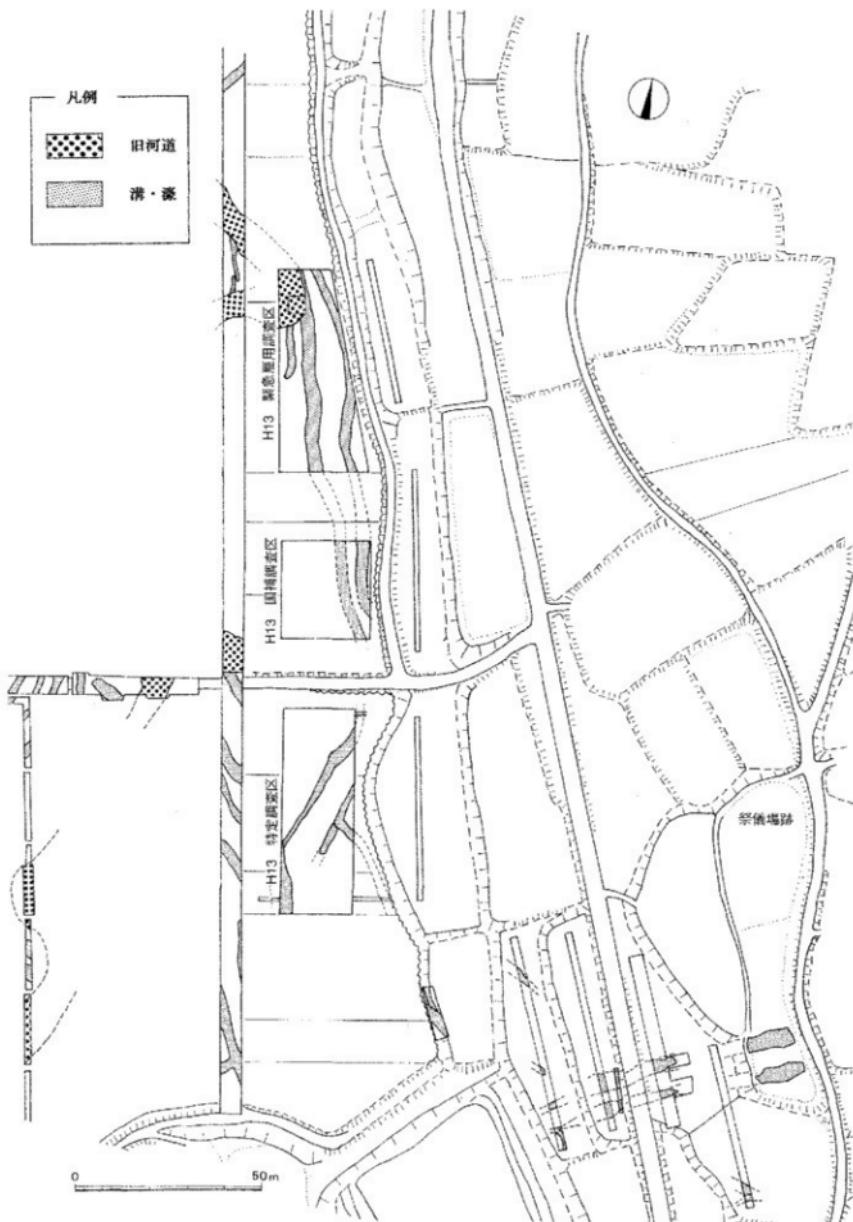
## (5) 小結

### 1. 弥生時代の遺構について

今回の調査では、弥生時代の遺構として、環濠1本（SD5）と旧河道1本（SD6）を検出した。いずれも台地のきわに沿って南北方向に延びている。SD5については、弥生時代後期を中心とする遺物が出土したが、この環濠の東側に隣接して弥生時代中期の環濠の存在が想定された。この中期の環濠については、調査区東壁のきわで面的にわずかに確認されたのみであり、東側の掘方は調査区外まで延びるものと推定される。SD5は、この中期の環濠を掘り直すように掘削されており、SD5出土の弥生時代中期の土器類も、この際に混入したものと考えられる。また、SD5上層では、甕棺のはか人骨が出土している。可能性としては、台地上の墓域からの流れ込みが考えられるが、現在のところ台地上では甕棺蓋を持つ墓域が検出されていないことや、甕棺がほぼ完形の状態で検出されていること、さらに甕棺と環濠内出土の日常土器の時期が一致することを考慮すれば、この想定については否定的にならざるを得ない。本調査区の北側に隣接して、平成13年度緊急雇用対策事業の調査区（以下、緊急雇用調査区）があるが、この調査区では、本調査区SD5につながる環濠内から、人骨が数体分発見された状態で出土している。鳥取県青谷上寺地遺跡では、弥生時代後期の自然流路内から殺傷痕のある人骨がまとまって検出されており、何らかの理由で殺された人間を水辺に投棄する習慣が弥生時代に存在した可能性がうかがえる（註1）。今回の調査で出土した人骨の詳しい分析については、緊急雇用調査区・本調査区出土分併せて現在検討中であるが、少なくとも何らかの理由で環濠内に人为的に遺体を埋葬（投棄）していた可能性は指摘できるであろう。

一方、SD6では弥生時代後期を中心とした土器群が出土しており、SD6が概期の旧河道である可能性が高い。ただし、河道の断面が逆台形を呈する点や、掘方から底面にかけての勾配が急である点を考慮すると、単なる河道ではなく、掘方の掘削など人為的な働きかけによって、環濠と同等の機能を果たしていたことが想定される。

SD5・SD6の南北へのつながりは、北側については、緊急雇用調査区において検出された遺構群とスムーズにつながるが、南側については、SD5は、南区中央付近で東側に大きく湾曲して調査区外に延び、SD6は調査区を斜めに横切って南東隅に延びており、台地のくびれ部分を挟んで南側で検出された遺構群とのつながりが問題となる（第29図）。台地くびれ部の南側では、平成13年度の特定調査で4本の環濠もしくは旧河道が検出されているが、本調査区の遺構群との関連性が指摘できるのは、SD1とSD3である。両遺構の具体的な内容については特定調査の報告書に譲るが、土層の堆積状況や環濠床面の高さなどを考慮すると、特定調査区のSD3と本調査区のSD5が連結していた可能性が高い。本調査区のSD6については、特定調査において該当する遺構がなく、南側とのつながりは今のところ不明である。ただし、特定調査区SD3の北西側に隣接して礫群が検出されているが、本調査区のSD6の上にも、後述のように礫群が堆積しており、関連性が指摘される。本調査区のSD6検出面は、SD5に比べると標高がかなり低く、特定調査区北側の礫群の下に、本調査区SD6につながる未検出の旧河道が存在する可能性が高い。今後の調査の進展を待って結論を出したい。



第29図 台地南西部遺構配図



第30図 調査区内における造構群の変遷

## 2. 調査区内における遺構群の変遷

本調査区においては、弥生時代の遺構以外にも、礫群や杭列など、古墳時代以降の遺構群も検出された。これらは、環濠・旧河道埋没後の調査区内の土地利用を考える上で有益な情報を提供しており、同時に、弥生時代の遺構群の削平・埋没の歴史を物語るものとしても、これらの遺構群を検討する意義は大きい。以下、本調査区内の遺構群の変遷について、Ⅰ期～Ⅳ期に分けて概観する（第30図）。

### ・Ⅰ期

調査区内において最初に環濠が掘削される。ほぼSD5と同様の方向に展開しているものと思われるが、掘方はSD5よりも東側にあるものと思われ、本調査区内では部分的な検出にとどまっている。

### ・Ⅱ期

Ⅰ期の環濠埋没後、環濠が再掘削される（SD5）。Ⅰ期の環濠よりもやや西側にずれるように掘削されたものと思われ、この時点でⅠ期環濠の西側の掘肩が消滅する。また、この環濠の西側に河道が走り、ほぼ併走して調査区内を南北に横切る（SD6）。

### ・Ⅲ期

Ⅱ期の環濠・河道が埋没し、礫群が投棄される。十層観察によれば、礫群の投棄に先立ってSD5とSD6の上面が平坦に削平された痕跡がうかがえるが、削平後の上砂の堆積がほとんどないことから、礫群の投棄とそれほど時期差はなかったものと判断し、Ⅲ期に一括した。礫群は円礫や角礫によって構成されるが、これらに混じて肩石・敲石・凹石といった礫石器や、弥生時代中期～後期にかけての土器が細片化した状態で出土している。礫群の分布はSD5・SD6上に沿って帯状に分布しており、礫群が非常に堅くしまった状態で検出されていることを考慮すれば、埋没後も湿地状になっていたSD5・SD6を、新たな土地利用に際して完全に埋め立てたことが考えられる。また、礫群の供給源については、沿岸部から採集してきたことも考えられるが、遺物の混入具合から判断すれば、大半は台地掘削時の廃土によるものと推定される。

### ・Ⅳ期

礫群を埋め立てるように造成土（7層）が盛られる。2層は調査区の東半部分を中心に、南区ではほぼ全域を覆っている。また、7層の西端部分に沿って杭列が検出されており、土層の観察でも杭列が7層の堆積に伴うものであることは明らかである。7層内からは旧石器や弥生時代中期～後期の土器・石器類のほか、朝鮮半島系の瓦質土器・陶質土器や銅鏡といった重要遺物も出土している。このことから、7層は調査区東側に隣接する台地部分の弥生時代包含層を削平して造成されたことが推測される。

以上が調査区内の遺構群の変遷である。具体的な時期については、Ⅰ期が弥生時代中期、Ⅱ期が弥生時代後期～古墳時代初頭である。Ⅲ期・Ⅳ期は出土遺物に大幅な時期差があり、明確な時期を確定できないが、もっとも新しい遺物が近世の陶磁器類であることから、この時期を当てておく。Ⅲ期・Ⅳ期における大規模な造成については、土地利用の観点からみれば、台地上の開墾や低地部の耕作地の拡大の過程としてとらえられるであろう。一方、弥生時代の遺構群の埋没過程という視点に立てば、

遺構群が削平を受けた後に客土が分厚く造成されていることが看取される。このことから、Ⅳ期の段階で台地の裾が西側に大きく張り出し、杭列付近が台池の裾部であった可能性が指摘される。Ⅳ期の丘陵裾は、近現代の水田化による削平で東側に後退することになるが、本調査区東端においてもⅣ期の7層が堆積しており、現在の丘陵裾部にもⅣ期の造成土が堆積している可能性が高い。したがって、現在の台地裾部は弥生時代の台地裾部とは一致せず、少なくとも台地西側では、弥生時代の台地裾部よりも西側に張り出している可能性を考えられるであろう。以上の理由から、現台地裾部で検出されたSD5のさらに東側に、未検出の環濠が眠っている可能性が非常に高い。本調査区南側の特定調査区で、もっとも台地よりで検出されたSD1につながる環濠が本調査区で検出されなかつたのは、このことを暗示している。今後は、弥生時代の台地裾部の確認および旧地形の復元と台地裾をめぐる環濠の検出が課題として残されている。

(註1) 『山陰鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター編2000『吉谷上寺地遺跡1・2』  
鳥取県教育文化財団調査報告書67・68 山陰鳥取県教育文化財団

# 図 版



調査区遠景（南より）



調査区航空写真



礫群検出状況（西より）



北区礫群検出状況（東より）



南区礫群検出状況（西より）



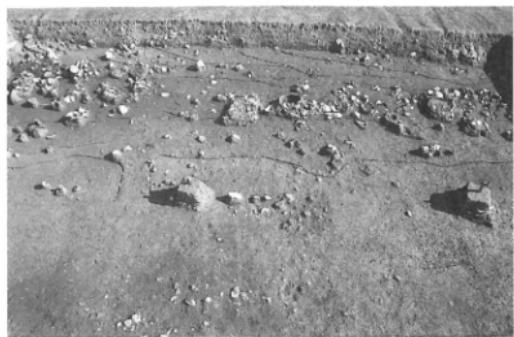
杭列検出状況（東より）



銅鏃出土状況



袋状鉄斧出土状況



北区 S D 5 检出状况



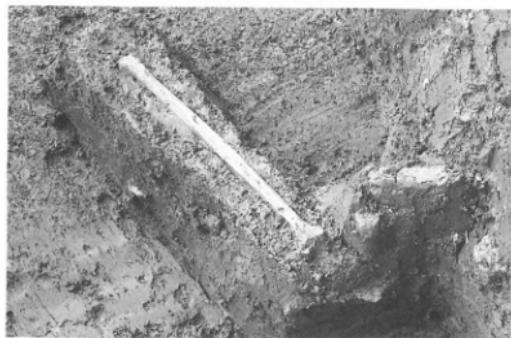
斐棺出土状况①



斐棺出土状况②



SD 5 I 層掘下げ調査風景



SD 5 I 層獸骨出土状況①



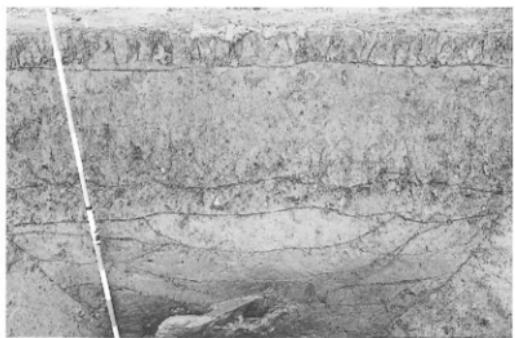
SD 5 I 層獸骨出土状況②



S D 5 I 層獸骨出土状況③



南区 S D 6 検出状況（南より）



S D 6 南壁土層断面

## 2. 池田大原地区の調査

### (1) 調査概要

平成13年度の調査では、平成9年度の調査の際に発見された東西方向にのびる弥生時代中期の溝がどのように延長しているのかを確認するために調査を行った。1区・2区は池田大原地区南側水田部にそれぞれ25m×2m・20m×2mで調査区を設定した。共に表土層の下はすぐに褐色地山層で遺物包含層は見られなかった。3区・4区は1区・2区と農道を挟んだ東側の畑作地にそれぞれ20m×2m・25m×2mで調査区を設定した。3区では、表土層・褐色埋め土層を約30cmほど掘り下げたあたりで褐色の地山層が現れ、機械による削平の跡が見られた。4区においてもほぼ3区と同じ状況で、調査区南側が急に落ち込んでいたが、土器などの遺物は見られなかった。5区は池田大原地区的南西に位置し、町道江里線を挟んで菅ノ木地区と隣接した水田部に20m×2mで設定した。約30cmほど掘り下げたあたりで褐色の地山層が見られた。北側に約60cmほど落ち込んだ部分が見られたが、遺物包含層は見られなかった。6区は5区の北東の水田部に20m×2mで設定した。約30cm～40cm掘り下げると赤褐色の土が全体的に見られるようになり、更に掘り下げたが遺物包含層はなかった。7区は6区の西側で約3m程低くなっている水田部に20m×2mで調査区を設定した。表上下約50cm～60cmのところから粒の大きな石が多数含まれた埋め土層が見られ、その層の下を掘り下げたが遺物包含層は見られなかった。8区は7区の南隣の畑作地に20m×2mで調査区を設定。1m程掘り下げたあたりから黒っぽい土が始め、その土を追って掘り下げてみたが、遺物包含層は見られなかった。9区は7区の北隣約1.7m程下がった水田部に22m×2mで調査区を設定したが、遺物包含層は見られなかった。

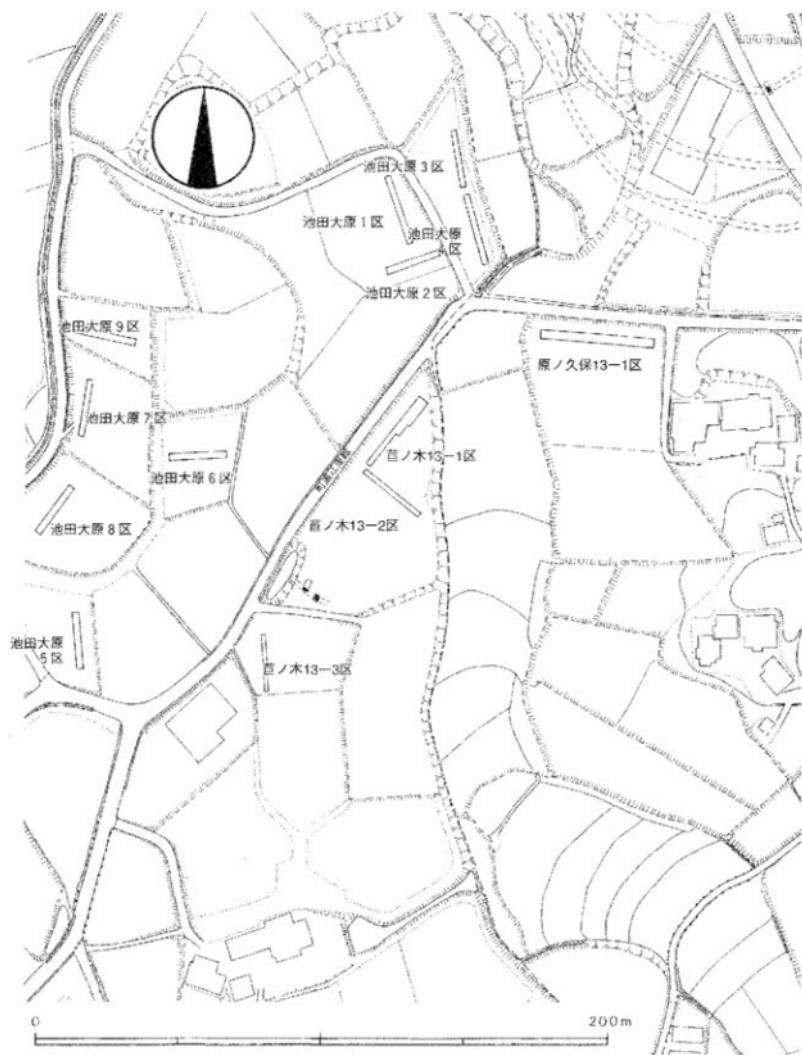
### (2) 土層（第32図）

池田大原地区の調査区のはほとんどが2次的な造成が行われているため、良好な基本となる土層はなかった。第32図の上層は池田大原8区の上層で、1層は表土、2層は褐色の埋め土層、3層も細かい石を多く含んだ埋め土層と思われた。4層は暗褐色土層で若干遺物を含んでいたが、擾乱されていることから厳密には包含層とは言えない。5層は黒褐色粘質土層でしまっている。6層は暗褐色粘質土層で5層よりも黒味を帯びていた。

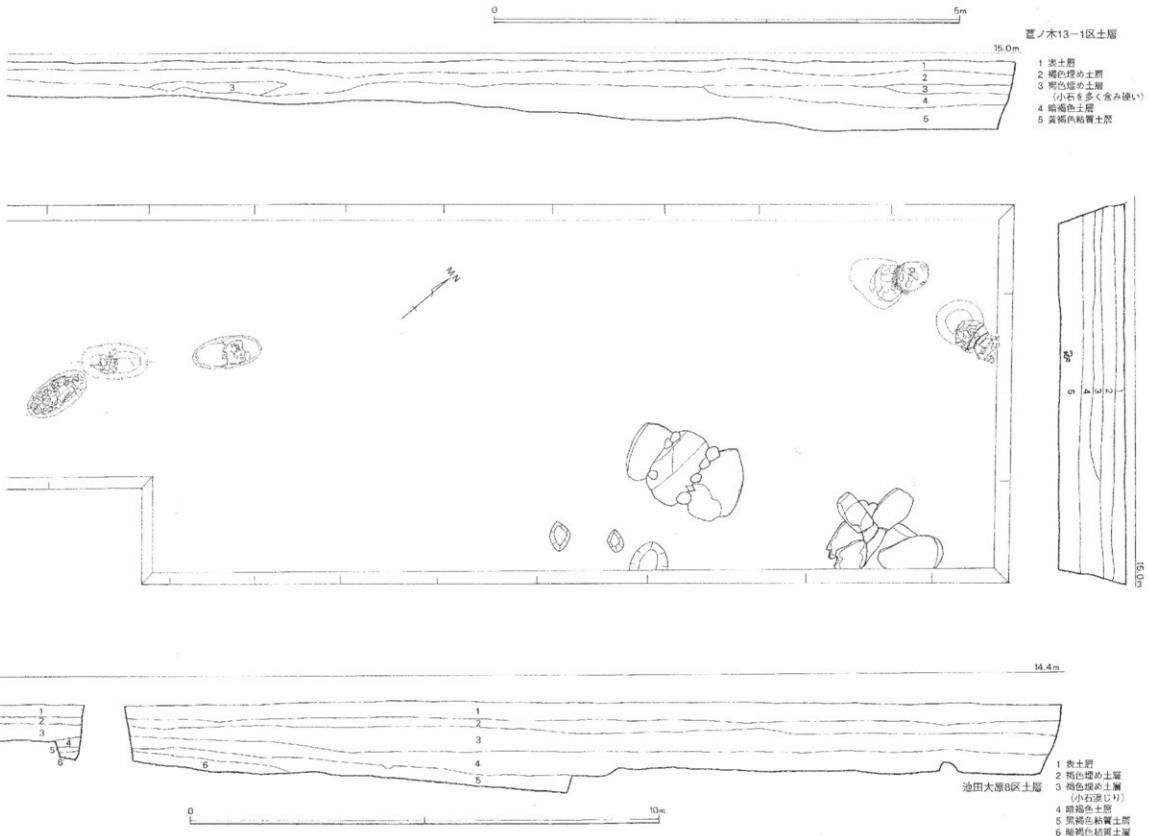
## 3. 菅ノ木地区の調査

### (1) 調査概要（第32図）

平成6年度の町道江里線改良工事に伴う調査で確認された溝状遺構がどのようにのびているか、また同調査で箱式石棺墓の抜き取り跡が4カ所見つかっており、これがどのように広がりを見せるのかを確認するために調査を行った。13-1区は当初30m×2mで設定したが、遺構の検出に伴い調査区を拡大した。この調査区からは、小児兜棺墓5基と右棺墓1基、石蓋土壙墓1基を検出した。遺物と



第31図 調査区位置図 (1/1000)



第32図 音ノ木13-1区遺構配図・土層図 (1/80)・池田大原8区土層図 (1/40)

して4号壇棺からガラス製小玉が216個、5号壺棺からガラス製小玉107個と銅釦と思われる遺物が副葬されており、石蓋土壤墓からはガラス製小玉151個と弥生後期の丹塗り袋状口縁の破片が副葬されていた。13-2区は13-1区の西隣に垂直になる形で25m×2mで調査区を設定した。北側から南側にかけてなだらかな勾配になっていたが、遺物包含層はなかった。13-3区は20m×2mで調査区を設定したが、遺物包含層はなかった。

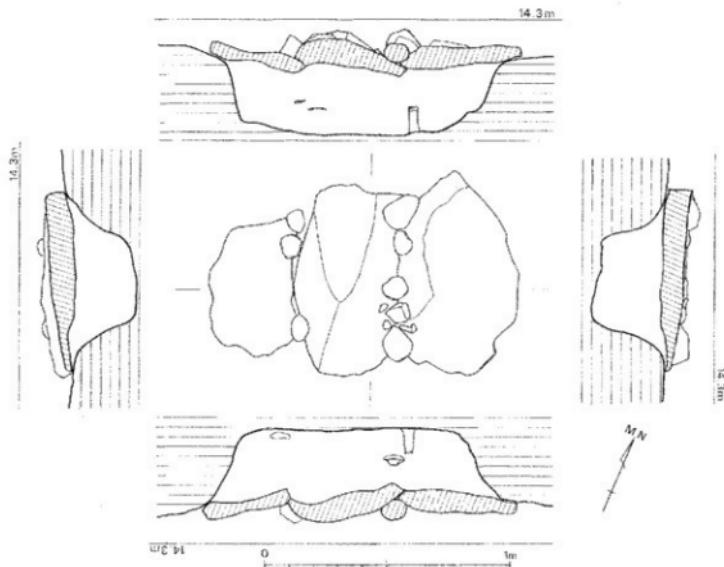
### (2) 土層（第32図）

今回調査した菅ノ木地区は3ヵ所であるが、その大部分は耕地整理のための2次的造成を受けており良好な基本的土層は見られない。壇棺墓を検出した菅ノ木13-1区においても、調査区南西側については削平されていた。第32図は菅ノ木13-1区の土層であるが、西から東にかけてゆるやかに傾斜しており、1層の表土の下に硬めの埋め土が見られた。部分的ではあるが、2層の下に粒の小さな石が多く見られ、これを3層とした。その下に4層の暗褐色土層と5層の黄褐色粘質上層が堆積する。

### (3) 菅ノ木13-1区出土の遺構及び遺物

#### ① 1号石蓋土壤墓（第33図）

この遺構は3枚の板状安山岩を土壤の上に蓋として乗せたもので、石と石が重なった部分に丸い自然石を3～5個並べておいている。蓋石の長軸は120.7cm、短軸は最大長が80cmを測る。蓋石を取り除くと長方形の土壤が掘られている。長軸110.5cm、短軸50cm、深さ約25cmを測る。内部にはガラス



第33図 菅ノ木13-1区出土1号石蓋土壤墓実測図 (S=1/20)

小玉151個と弥生後期の月塗り袋状口縁（復原径11.7cm）の破片が床面より浮いた状態で副葬されていた。

#### ②1号石棺墓

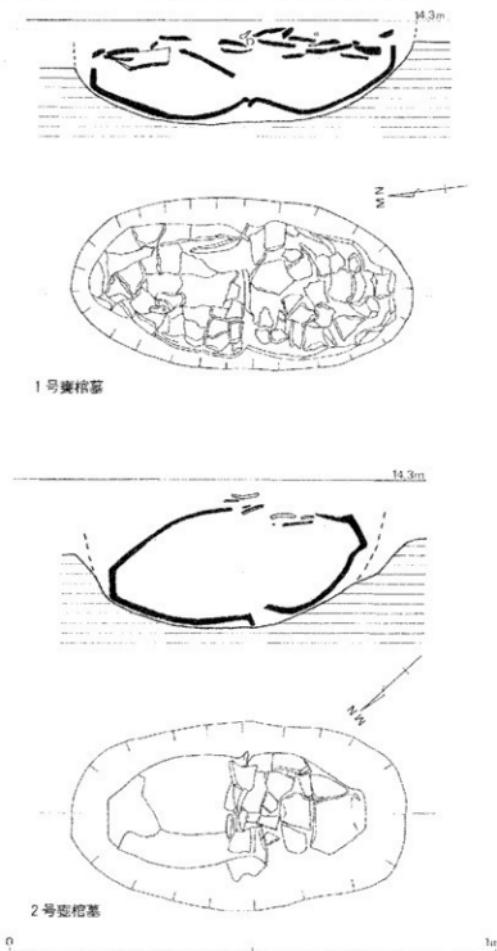
調査域北東隅の壁際から検出され、1号石蓋土壙とは1m離れている。大半が壙に入っていたため取りあげずそのまま埋め戻したが、側石をもつ箱式石棺墓と考えてよい。なお時期については不明である。

#### ③1号甕棺墓（第34・35図）

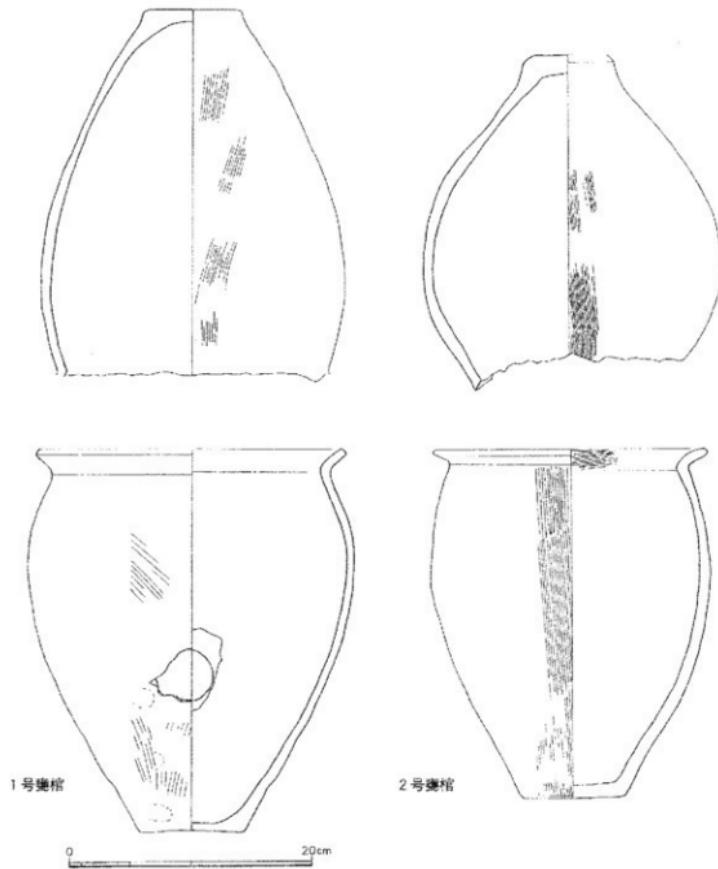
調査域のほぼ中央部の浅い所からの出土である。西側の方は削平されており遺構の検出は認められない。この上下甕とも半分しか残っていない。この付近にはほぼ同時期のものが3基位置する。下甕は長軸を南北にとり、器高31cm、口縁径25.6cm、最大胴長26.6cm、底部径8.6cmを測る。底部はわずかにあげ底で、立ち上がりは直線的で、体部上半に最大値をもつ。口縁部は直線的に外反し、端部は斜行している。胴中央から下部に焼成後に付けられた径4cmの穿孔がある。胴部全体にハケ目が施されているが、かなり摩耗している。上甕は口縁部が打ち欠かれていている。器高30cm、頸部径21.2cm、最大胴長25cm、底部径8cmを測り、下甕より若干小さいがほぼ同器形である。両者とも胎土に石英や角閃石、白い砂粒を多く含む、色調は暗褐色を呈し、焼成良好。時期は後期中葉である。

#### ④2号甕棺墓（第34・35図）

1号甕棺の北側に接し、長軸は東西に近い。下甕は器高28.4cm、口縁径22.4cm、最大胴長23cm、底部径8.4cmを測る。底は平底で、体部中央に最大値をもち、全体に丁寧なハケ目が施されている。口縁はわずかに内湾しながら外反し、端部は



第34図 菖ノ木13-1区出土 1号・2号小児甕棺実測図 (S=1/10)

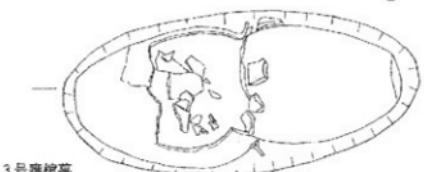
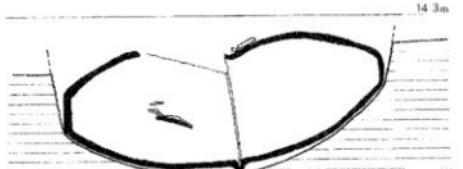


第35図 茅ノ木13-1区出土1号・2号小児埴棺実測図 ( $S=1/4$ )

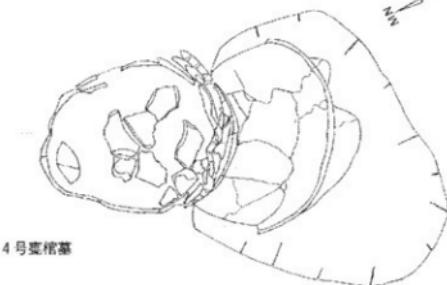
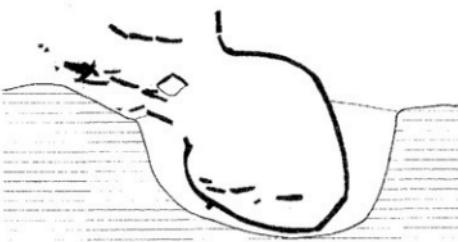
丸くおさめられている。内面にはハケ目調査が、外面はナデが行われている。なお胸上半部にはスヌが付着している。胎土、焼成とも良好である。上窓は壺の口縁部を打ち欠いたものである。残存器高は約25cm、最大胴長25cm、底部径7cmを測る。底部はやや狭く、立ち上がり部をしばっている。胴部は球形状にふくらみ、肩部にかけて丁寧なハケ目が施されている。胎土には白い砂粒が目立ち、色調は黄褐色であるが、かために焼き上げられている。時期的には後期前葉後半と考えられる。

⑤ 3号壺棺墓（第36・37図）

ほぼ完全な形で検出され、長軸を南西方向にとっている。下壺は器高37cm、口縁径24.2cm、最大胴長25.5cm、底部径8.6cmを測る。形状はいびつで、いわゆる胴長タイプである。底部はわずかにあげ底で、立ち上がりは直線的に伸び、胴最大値は体部中央にある。口縁部はゆるく外反し、端部は尖り気味におさめられている。ハケ目は器表全体に施され、口縁内面にも施されている。また胴部上半にはススが付着している。上壺は器高30cm、口縁径23.4cm、最大胴長23.4cm、底部径9cmを測り、下壺よりひと回り小さい。底部は平底で、胴部はあまり張らない。口縁は外反し、端部は丸くおさめられている。胴部は粗いハケ目調整が全体に施され、上半部にはススが付着している。内面底部にはしづったような痕跡がある。胎土には石英や白い砂粒、雲母が含まれる。色調は暗灰色を呈し焼成良好。

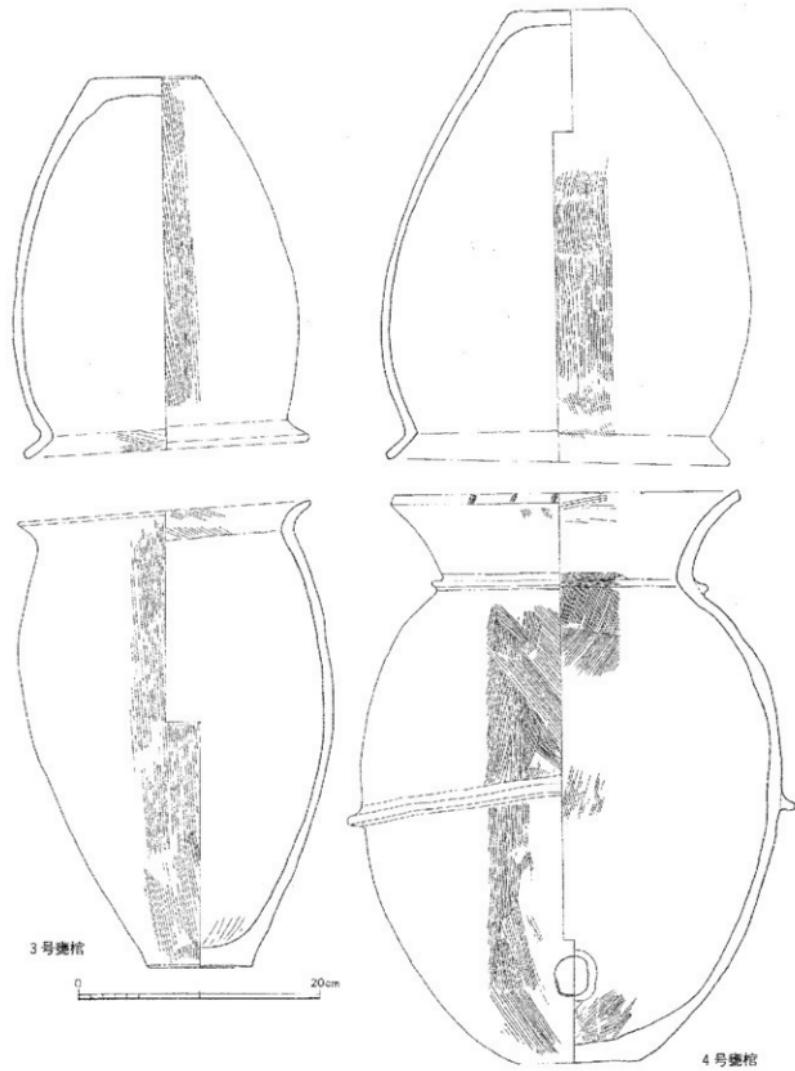


3号壺棺墓



4号壺棺墓

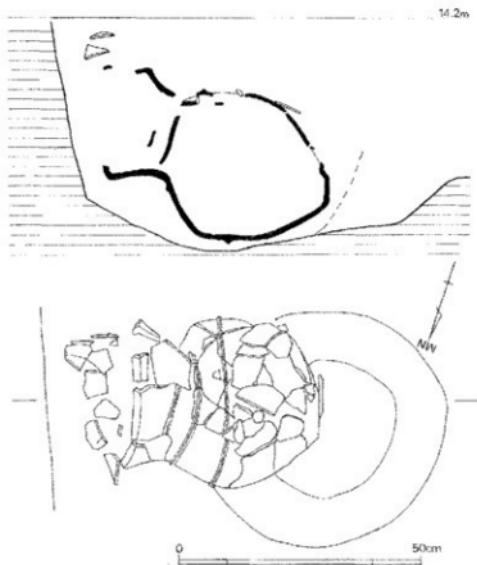
第36図 菖ノ木13-1区出土 3号・4号小児壺棺実測図 (S=1/10)



第37図 苗ノ木13-1区出土 3号・4号小児櫛棺実測図 (S=1/4)

⑥ 4号壺棺墓 (第36・37図)

調査振北西部からの出土で5号壺棺墓と約1m離れている。下が大型の壺、上が甕で今回調査の中では最大値を示す。掘り方については上面まで図示できなかったが、上下の合わせ具合からしてその構造が推測される。下甕は器高46.5cm、口縁径28.7cm、最大胴長36.6cm、底部径10cmを測る。底部は平底でカーブを描きながら立ち上がり、胴部は球状を呈し、中央部に台形状の貼り付け突帯を巡らす。頸部にも小ぶりな突帯を巡らしている。口縁部は朝顎状に開き、端部は斜行するが、ここには縄目の網目を等間隔に入れている。口縁内面は粗いハケ目調整が施されたあとナデられている。胴部は全体を細かいハケ目調整が施され、その上に丹が塗られている。なお、胴下半部に焼成後の穿孔が見られる。上甕は器高37cm、口縁径28.4cm、最大胴長30.4cm、底部径10cmを測り、口縁径はほぼ同じである。底は平底で、胴部最大値は体部上半部に位置する。口縁は外に開き端部は丸くおさめられている。胴部は全体的にハケ目が施され、一部ススが付着している。胎土には石英、白い砂粒、雲母が含まれ、色調は暗褐色を呈する。なお、この壺棺墓にはガラス小玉216個が副葬されていた。時期的には後期中葉頃と考えられる。



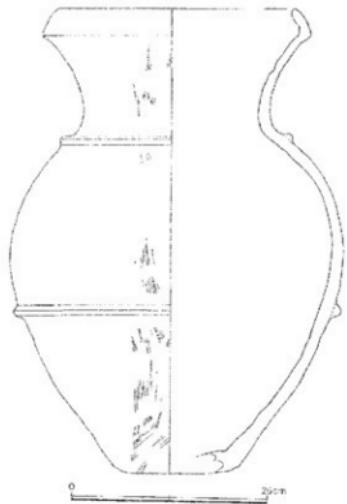
第38図 茅木13-1区出土 5号小児壺棺実測図 (S=1/10)

⑦ 5号壺棺墓（第38・39図）

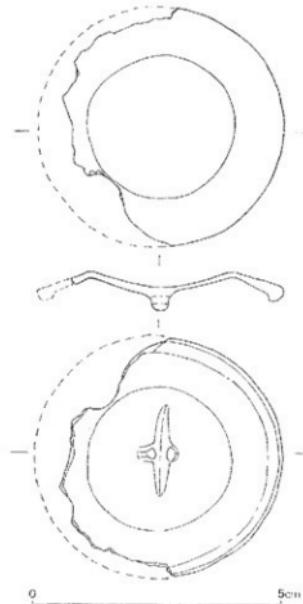
複合口縁の大形壺形土器を利用。下壺の出土状態は北側壁に近い所からで斜めに置かれている。上壺は壁の中に入り込んでおり未確認。底部は平底である。胴部は上半部に最大値をもち、やや中央下半部に断面台形状の貼り付け突帯をもつ。また頸部のくびれ部にもこぶりな突帯が巡っている。口縁は「く」字形に内湾し端部を丸くおさめている。この棺には底部の方に青銅製鉗1個とガラス小玉が107個埋葬されていた。髣高47cm、最大腹径34.2cm、口縁径24.7cmを測る。胴部はかなり磨耗受けているがハケ目がわずかに残り、中央部にはススが付着している。また底部に近い所に穿孔が施されている。胎土には白い砂粒や石英が多く含まれ、色調は赤褐色を呈する。時期的には後期中葉頃と考えられる。

⑧ 5号壺棺墓出土銅鉗（第40図）

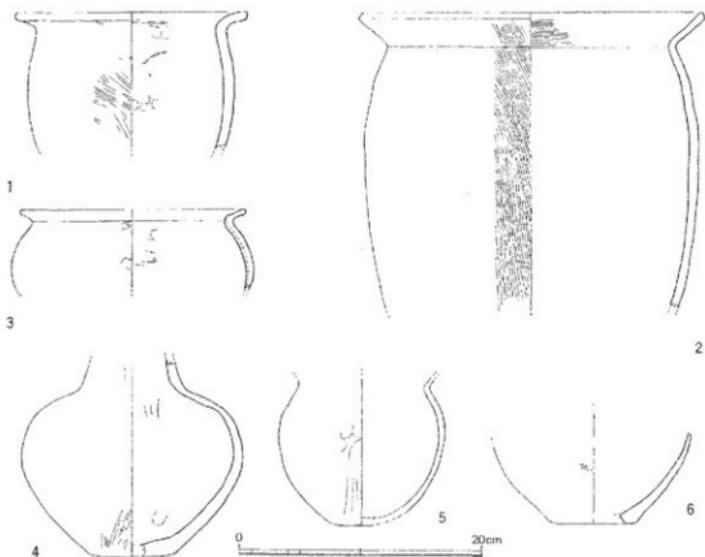
下壺の底に貼りつくように出土。縁の部分が半分欠失しているものの、ほぼ全体が復原できる。直径5cm、高さ0.8cmで縁の部分は反りをもち肥厚している。半球座の裏側には鉢が付く。内外面とも素文で、表面は光沢があり軽い。時期は壺が後期前葉であり同時期と考えられる。銅鉗の出土は本遺跡では初例であるが佐賀県布施ヶ里遺跡や西山田二木松遺跡から半球状のものが出土しているが、本例とは形状の相違がある。



第39図 茜ノ木13-1区出土 5号小壺棺実測図 (S=1/5)



第40図 茜ノ木13-1区出土銅鉗実測図 (S=1/5)



第41図 茅ノ木13-1区出土のその他の土器 ( $S=1/4$ )

#### その他の土器（第41図1～6）

1は口縁が外反し端部は丸くおさめられ、胴部はゆるく張り出している壺である。ハケ目調整は胴部に斜行するように施されるが残りはよくない。スヌの付着が見られる。口縁内面はハケ目のあとナデされている。胎土には石英や白い砂粒を含み、焼成は良好である。2は復原口径28cmの壺である。口縁は「く」字形に外反し、端部は斜行する。胴は長くあまり張らない。器表と口縁内面には丁寧なハケ目調整が施されている。胎土には石英を含み焼成良好である。3は短頭壺で復原口縁径18.4cmを測る。口縁は短く外反し端部は丸くおさめられている。胴部は口縁よりも張り出している。胎土は精選されているが石英粒が目立つ。色調はにぶい橙を呈する。4は口縁部を欠く壺である。頸部はしばられやや内側に向かって直行するがおそらく二重口縁を呈すると思われる。胴部は球形状に丸くふくらみ、底は平底である。胴の一部に丹塗り跡が窺えるが、全体に塗付されていたと思われる。胎土には石英粒や白い砂粒が目立ち、焼成もよく固い仕上がりとなっている。5は口縁部を欠くが、短頭壺である。底部も丸くなっている、全体は球状である。胴部上半は摩耗しているが、下半部は丹が残っており、全体に塗付されていたと思われる。胎土には石英粒や白い砂粒を含み、焼成良好。6は壺と考えられるが胴部上半から欠失している。底部径は6.4cmを測るが、焼成後に穿孔されている。色調は黄褐色。以上の土器は茅ノ木本地區の墓域からの出土であり、3～5は供獻土器としての性格を有し、他は壺棺として使用されたものかも知れない。

## 4. 原ノ久保地区的調査

### (1) 調査概要（第43図）

原ノ久保地区では、これまで平成8年度と12年度、墓域の範囲確認調査を実施している。前者の時には石棺13基や土塚墓などが発見して確認された。そして前回は、その墓地がどこまで拡がるかということ、西側の谷状地形に接する村田和子氏所有の水田に南北に1本、東西に2本の試掘場を設定した。南北の第12試掘場からは石蓋土塚墓1基と、その周囲から弥生中期の壺形土器と高坏が出上した。

また、第10区では弥生中期の小泡窓棺墓が1基検出された。

今年度の調査区は昨年と同じ水田の町道江里線に併行して、40m×3mの規模で試掘場を設定した。試掘場の東側では地山まで割合浅く水道管が埋設されており掘削を受けている状況で、地山は東に行くに従って深くなり谷状地形に落ち込むようになっている。

遺構は石棺墓1基、石蓋土塚墓1基、泡窓棺墓9基が検出されている。

### (2) 土層（第43図）

原ノ久保13-1区

土層は東から西へ傾斜している。1層は耕作土層、2層は灰褐色上で畑から水田化した時の埋め土である。3層は暗褐色粘質土層で、原の辻遺跡の台地部分に見られる弥生時代の遺物包含層である。4層は褐色粘質土層で、遺構は3層からこの4層にかけて掘り込まれている。なお、4層は從って遺物の出土はない。本来の調査層はほとんどがこの層位まで終わる。しかしここでは西側が大きく落ち込んでおり5層の明褐色粘質土層と6層の黄褐色粘質土層が堆積している。6層は水分を含みやわらかく、途中までしか掘っていないが、西側の谷部分につながるものと思われる。

### (3) 遺構および遺物

#### ① 1号石棺墓（第42図）

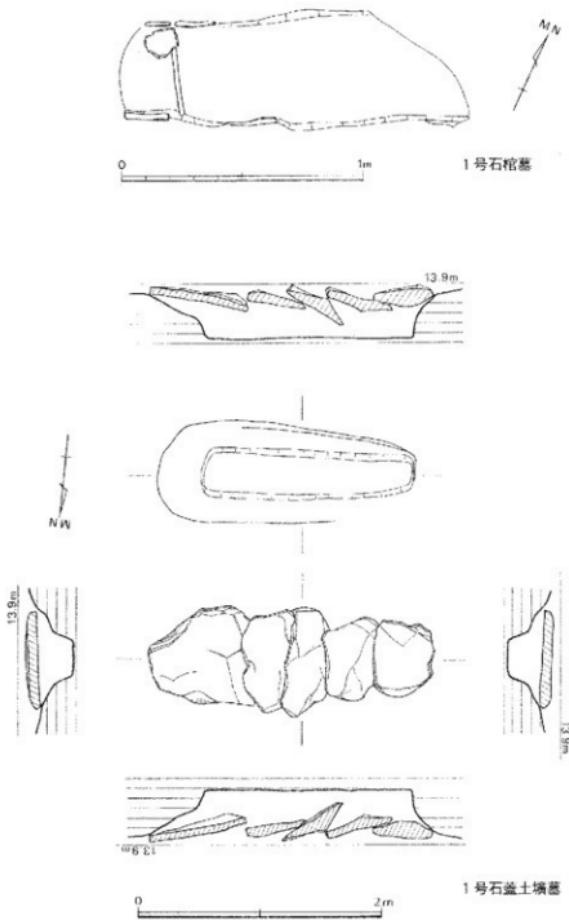
東側の北壁寄りに出土。遺構のほとんどは削ぎされ、わずかに板状の安山岩製の両側の一部と小口石が残っている程度であるが、全体の規模は推定される。長さ約150cm、幅約40cmで床石ではなく、副葬品もない。

#### ② 1号石蓋土塚墓（第42図）

1区のはば中央南壁寄りに検出された。やや扁平な安山岩製の石を5枚、東からよろい戸状に重ねている。石の大きさは東から西へ従って小さくなっている。蓋石の長さは236cm、幅88cmである。蓋石を剥っていくと、側板はみられず土塚だけである。土塚の長さは174cm、幅40cm、深さ25cm、長方形を呈しているが西側がやや狭くなっている。土塚中に土の堆積はあるものの、副葬品は何もなかった。

#### ③ 1号泡窓棺墓（第44・45図）

弥生中期壺で、1号石棺の南側に位置している。暗褐色粘質土層からの出土であるが、後世の削平



第42図 原ノ久保13-1区出土1号箱式石棺墓（S=1/20）及び1号石蓋土塙墓（S=1/40）

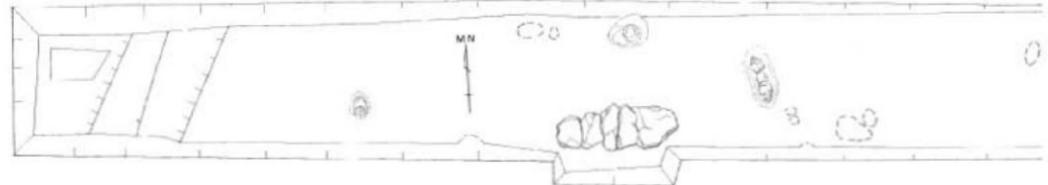
を受けており損壊が著しい。口縁から胴部にかけて復原されたが、口縁はいわゆる勧先状口縁で、ゆるく外側に平坦に延び、端部は角張り、沈線が造っている。頭部は外反し、胴部つけ根はよくしまっている。胴部は球形になると思われるが、2段のM字状の貼り付け突帯を有する。底部は平底で比較的うすい仕上りとなっている。色調は黄褐色で、焼成は良好。時期は弥生中期中葉と考えられる。

## 原ノ久保13-1区土層図

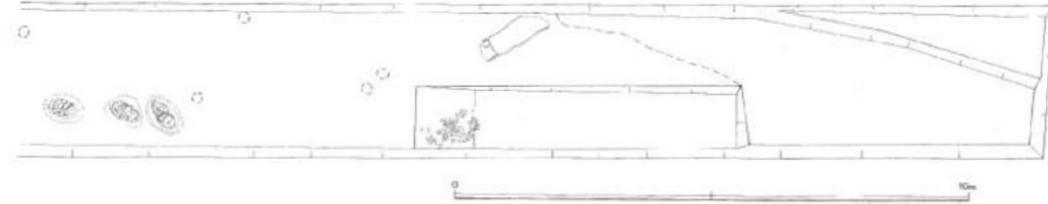
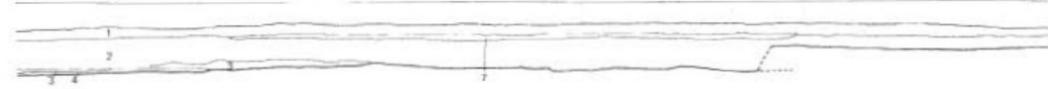
1. 稲作土層
2. 残根色土層
3. 暗褐色粘質土層
4. 褐色粘質土層
5. 明褐色粘質土層
6. 實褐色粘質土層



14.9m



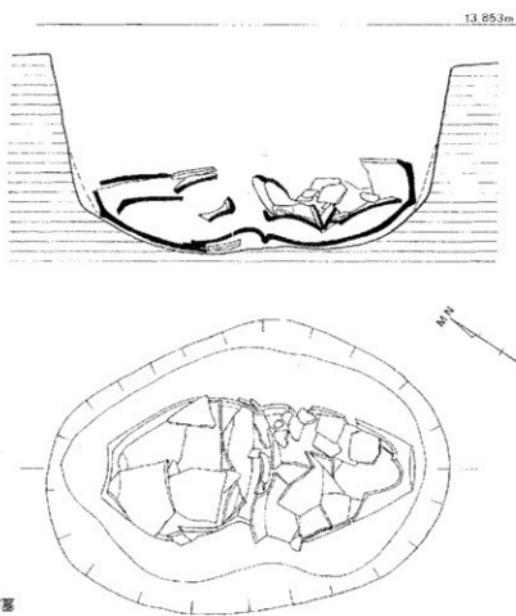
14.9m



第43図 原ノ久保13-1区遺構配置図・土層図 (S=1/80)



1号櫛棺墓



2号櫛棺墓

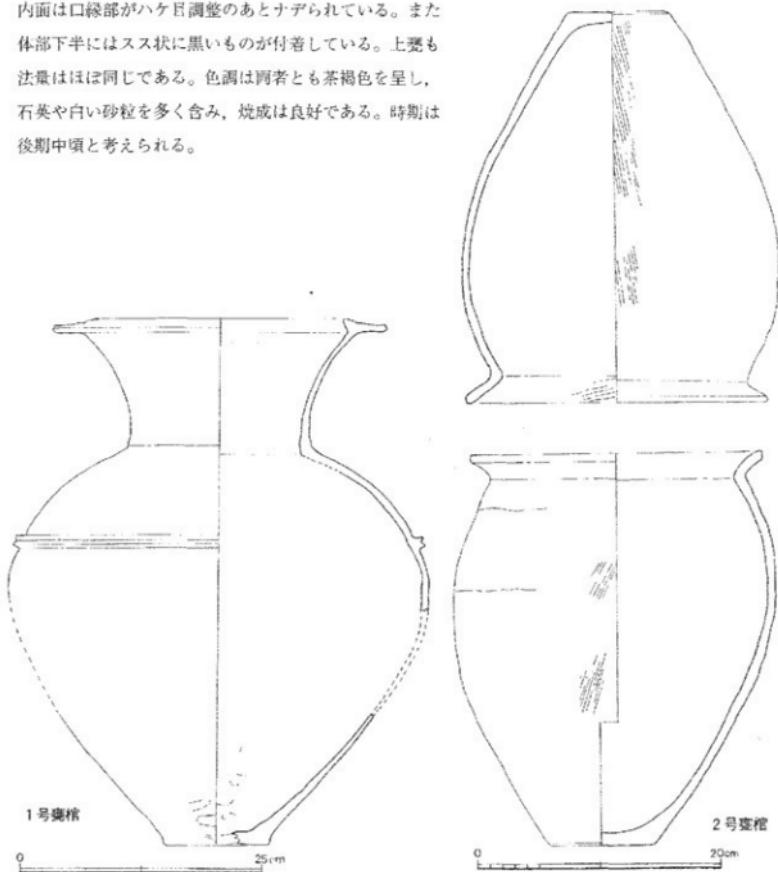
0 1m

第44図 原ノ久保13-1区出土1号・2号小兒櫛棺実測図 ( $S=1/10$ )

① 2号壺棺墓（第44・45図）

弥生後期のほぼ同時期の小児合わせ1号壺棺が2号、3号、4号と東西に3基並んだ状態で埋葬されていた。そして掘り方も暗褐色土から褐色土層を深く掘り込んで、ほぼ横に置いている共通性が見られる。2号壺棺はほぼ水平に置かれ、器形もほぼ同じであるため、どちらが上か下か判断がつかないが、一応南側の土器を下壺とする。下壺は高さ32cm、口縄径24.2cm、最大胴部26cmを測る。底部は平坦で最大肩長部は上位に位置する。頸部はよくしまり、口縁部は外反し、腹部は丸くおさめられている。器表面はハケ目痕がわずかに残り、全体的に摩耗著しい。

内面は口縁部がハケ目調整のあとナデられている。また体部下半にはスス状に黒いものが付着している。上壺も法量はほぼ同じである。色調は両者とも茶褐色を呈し、石英や白い砂粒を多く含み、焼成は良好である。時期は後期中頃と考えられる。



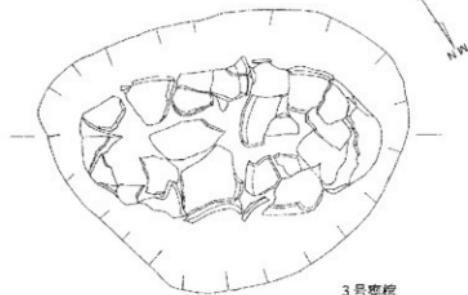
第45図 原ノ久保13-1区出土1号 ( $S=1/5$ )・2号小児壺棺実測図 ( $S=1/4$ )

## ⑤ 3号壺棺墓（第46・47図）

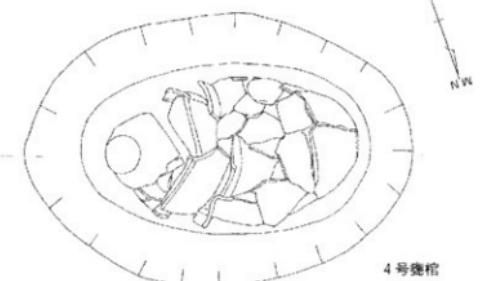
2号壺棺から30cm西側に位置し、長軸はやや北東寄りで掘り込みは暗褐色土から褐色土に深く入っている。やや斜めに埋置され、下蓋は高さ32.8cm、口縁径24.9cm、最大胴部24.7cm、底部径9.9cmを測る。底は平坦で中央部に穿孔されている。胴は長胴で体部上半に最大径が認められる。口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさまられて若干ひずんでいる。ハケ目は器表全体に施されているが、やや粗い調整である。上蓋は器高27cm、口縁径24.4cm、最大胴部25.8cm、底部径8.2cmを測る。底部はやや凹凸が見られるものの平底で、立ち上がりから胴部にかけて外反し、胴部は球状に丸くふくらむ。口縁内面は直線的に外反し、端部は丸くおさまる。器表はハケ目溝整が施されているがかなり摩耗を受けている。口縁部はひずみを受けている。また胴部内面の下側の部分は黒ずんでいる。時期的には後期前葉後半頃か。

## ⑥ 4号壺棺墓（第46・47図）

3号壺棺から西側に約1m離れたところに長軸をほぼ東西にして埋葬されている。2、3号同様深く掘られている。上蓋は東側、下蓋は西側に位置し、若干傾斜している。下蓋は器高31cm、口縁径27.3cm、最大胴長28.6cm、底部径9cmを測る。全体的にいびつな作りで



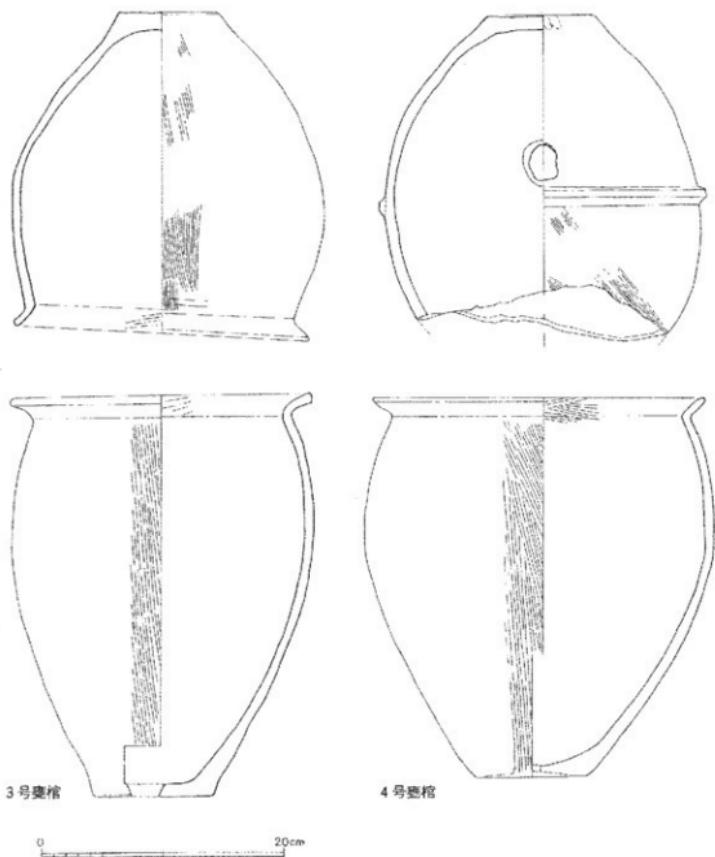
3号壺棺



4号壺棺

第46図 原ノ久保13-1区出土3号・4号小児壺棺実測図 (S=1/10)

器表には粗いハケ目が施されている。口縁内面にはハケ目があり、外面はナデ調査されている。なお底部中央部に焼成後穿孔されている。胎土には石英や白い砂粒、雲母を含んでいる。上甕は甕というより壺である。頸部から口縁部にかけて打ち欠かれている。現存器高は26cm、最大胴長27cm、底部径8.8cmを測る。底はわずかに上げ底で立ち上がりから胴部にかけては球形状にふくらみをもちハケ目調査が施されている。体部中央にM字状の貼り付け突帯を1条巡らす。なお、突帯下に幅2.3cmの穿孔が焼成後つけられている。從って4号甕棺は上・下とも穿孔が施されている。なお上甕の色調は黄褐色を呈し胎土には角閃石を多く含み焼成はやや甘い。時期的には後期中葉前半と考えられる。



第47図 原ノ久保I3-1区出土3号・4号小兒甕棺実測図 (S=1/4)

⑦ 5号壺棺墓

⑧ 6号壺棺墓（第48・49図）

1号石蓋土壙墓の東側に位置し、長軸は南北に向く。この壺棺は3個体の甕が合わさった、いわゆる三重甕墓である。南側の一番下の甕棺は器高32cm、口縁径23.2cm、最大胴長23.7cm、底径7.8cmを測る。底部は若干の上げ底で、全体的には長胴である。口縁は外反し端部は丸くおさめられ、内側はハケ目調整のあとナデされている。胴部器表は比較的丁寧なハケ目調整が行われている。色調は暗灰色で、胴部はススで墨ずんでいる。中の甕は上甕よりもひと回り小さく、口縁径17cmを測る。底部と胴下半部が打ち欠かれている。全体的に薄手に作られ、器表には丁寧なハケ目調整が施されている。口縁は頭部から大きく外反するが、わずかに内湾し、端部は直線的におさめられている。上甕は器高27cm、口縁径19.1cm、最大胴長21.4cm、底部8cmを測る。底部は平底で、胴部の最大長は体部のほぼ中央に位置する。口縁は頭部がやや厚くなり外反するが、反りは浅く端部はやや尖がりぎみにおさめられている。口縁内は丁寧なハケ目が施され、外側はナデされている。胴部は器表全体に丁寧なハケ目調整が施され、口縁から5cm程下った所では7cmの幅で帯状に黒くなっている。また内側の下半部も黒くなっている。胎土には白い砂粒や角閃石を含む。焼成は良好で色調は茶褐色を呈する。3個体ともほほ後期中葉頭と考えられる。

⑨ 7号壺棺墓

この壺棺墓は調査廻の南壁に確認されたもので、茶褐色をした底部が見られたが、取り上げは行わなかった。

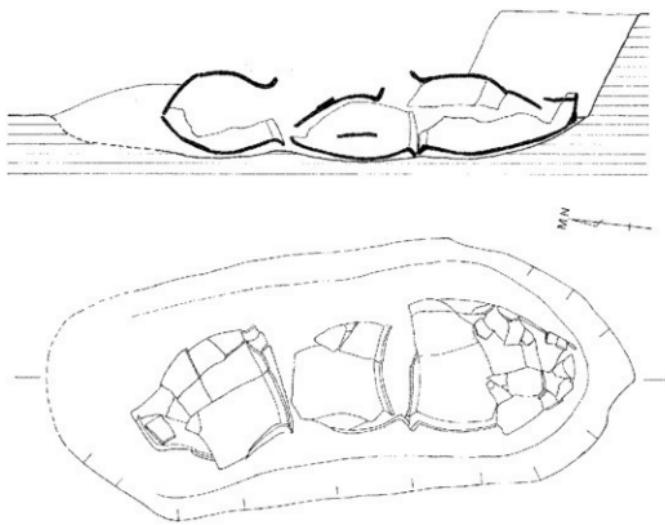
⑩ 8号壺棺墓（第48・49図）

調査廻の中では一番西寄りの深い暗褐色土層からの出土であるが、上甕の一部口縁をのぞくほとんどと、下甕の半分が欠失しているが、それでも特徴的なものは判断できる。上下甕とも弥生中期の須玖II式である。下甕器高は34.5cm、口縁径27.6cm、最大胴長25cm、底部径7.8cmを測る。底部はあげ底で、胴部はやや外反しながら立ち上がり、体部上方で丸くふくらみ、頭部に断面三角形の貼り付け突帯が1条巡る。口縁は内側に突起状につまみ出され、平坦部はわずかに傾斜しながら外湾し、端部は丸くおさまる。口唇部はナデされ、胴部器表全体にやや粗いハケ目調整が施されている。上甕は復原口径25.5cmと下甕よりひと回り小さい。形状は下甕と同じであるが器壁がうすく、器表のハケ目が細く丁寧に施されている。

⑪ 9号壺棺墓（第50・51図）

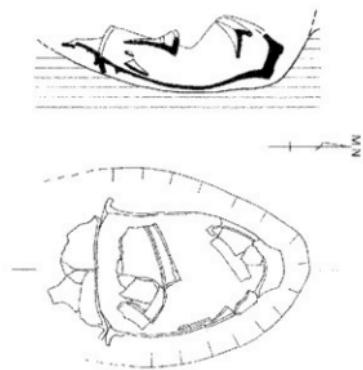
1号石蓋土壙墓の1.5m北に位置している。当時の埋葬状態が最も良く残されていた遺構で、斜めに穴状に深く掘られた中に入れられていたため、保存状態もよかつた。下甕は器高35cm、口縁径25.1cm、最大胴長27.4cm、底部径27.4cmを測る。底部は平底で胴部最大長は体部上半に位置する。また穿孔は焼成後、下半部に施されている。口縁は外反し、端部は斜行し、中央が凹んでいる。内面にはハ

14.0m



6号槨

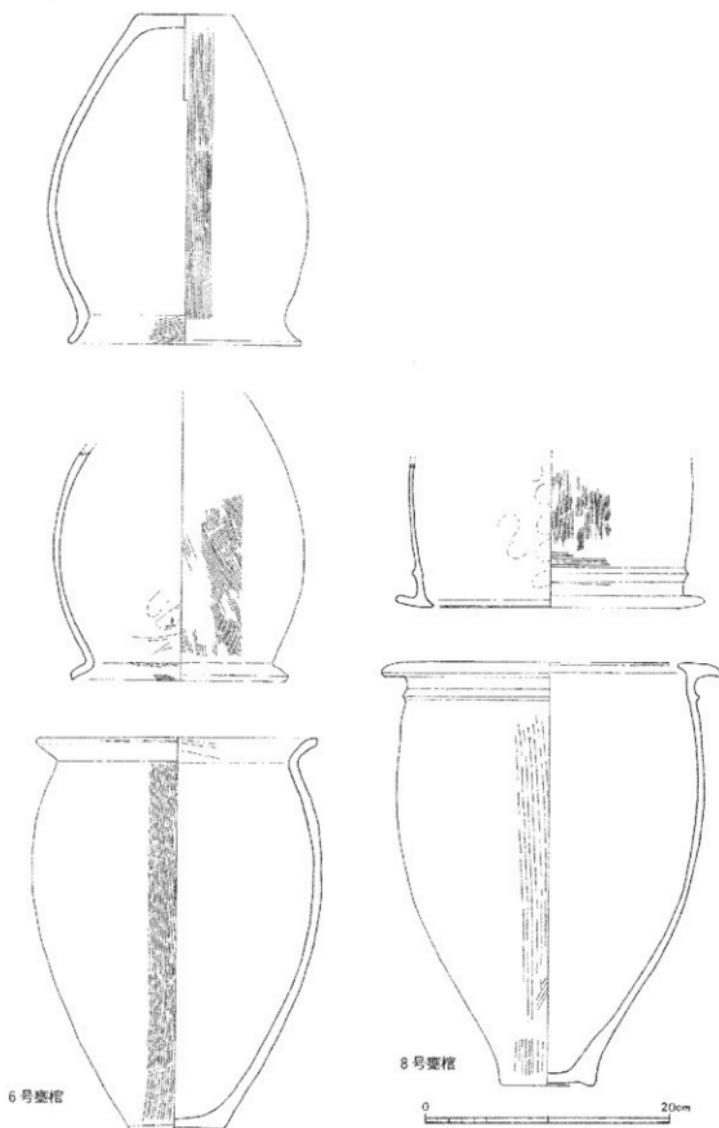
13.9m



8号槨

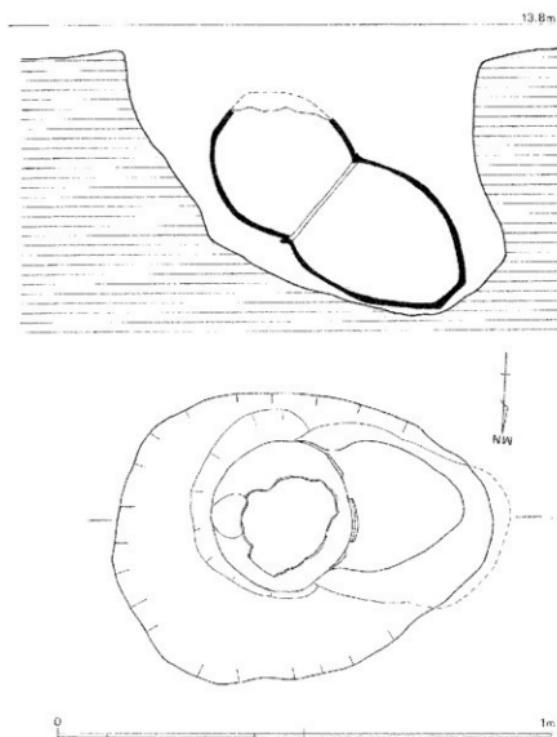
0 1m

第48図 原ノ久保13-1区出土 6号・8号小児槨実測図 (S=1/10)

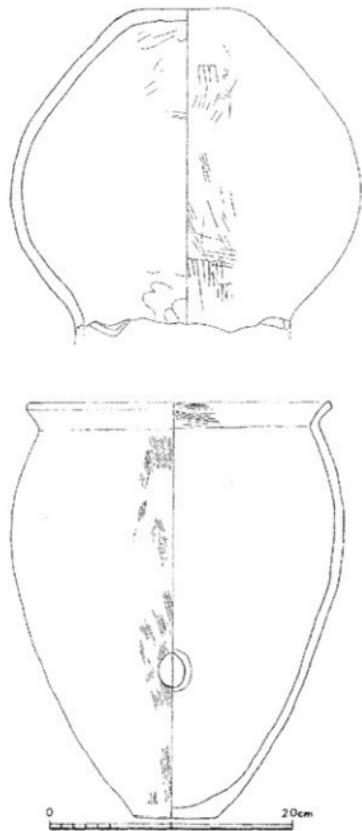


第49図 原ノ久保13-1区出土 6号・8号小児墓棺実測図 (S=1/4)

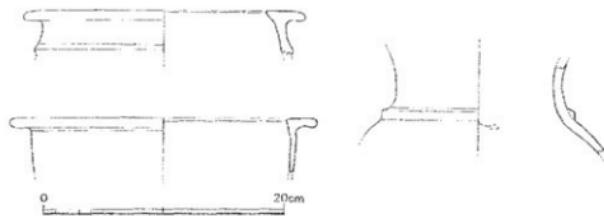
ケ目が施され、外面はナデ調整されている。なお胴部の器表には全体にハケ目が施されているが、摩耗している部分も多い。胎土には石英や白い砂粒、雲母を含み、色調は褐色を呈する。上蓋は蓋である。頸部から口縁部は打ち欠かれている。残存高は約27cm、最大胴長28.7cm、底部径9.5cmを測る。外面には全体に丹が塗付され、その上をヘラ状工具で磨かれている。底部は平底であるが両端が丸味をおびている。時期的には後期前葉と考えられる。



第50図 原ノ久保13-1区出土 9号小児墓棺実測図 ( $S=1/10$ )



第51図 原ノ久保13-1区出土9号小児斎棺実測図 ( $S=1/4$ )



第52図 原ノ久保13-1区出土その他の土器 ( $S=1/4$ )

## IV. まとめ

平成5年度から幡鉢川流域総合整備計画で本格化した原の辻遺跡の調査は点から面による発掘調査により、一支国の中心集落としての実態が次々と明らかになり、大陸や朝鮮半島との交流が活発に行われていたことも判明した。

原の辻遺跡の出自については、台地先端部東側から西側にかけて板付Ⅱ式土器の出土が断片的に見られており、まだ大きな集落となり得ていないことを示している。従ってこの時期には環濠の存在も確認されない。環濠が台地を巡りはじめるのは、弥生時代中期前半の須玖Ⅰ式古段階の時期と考えられるが、その後中期後葉段階には濠の埋没が進行していく。また低地部では、居住区が放棄され、台地の中に吸収されていく現象が見られる。後期になると台地の中が生活の中心になったと思われ、底地部分は水田化されていく。このことはプラントオバール分析等によっても裏付けられている。また三重に巡らされ埋もれていた環濠は再び後期になると掘り返しが行われ整備される。おそらく軍事的緊張が現われ、防衛の必要が生じたものと思われる。

今年度の調査は台地西側部において、環濠等状況調査という県単独調査と、本報告が主体を成す環濠部分の調査、それに加えて緊急雇用対策事業の中で実施した雇用区調査があるが、これらの調査はいずれも台地西側の裾部を巡る環濠を主体として行ったものであり、弥生中期から後期にかけて膨大な量の遺物の出土があった。雇用区では町状遺構や杭列、それに旧河道が検出されている。遺物では銅鏡8点、貨泉4点、銅釧2点、袋状鉄斧が出土しているが、注目されるのは人骨や獸骨が出土していることであり、人骨は2箇所に集中しており、今後の分析結果が待ち望まれる。特定調査では凝灰岩で作られた、人の顔を表した人面石が出土した。あまりにもリアルな表情は、ムンクの絵画に出てくる「叫び」そのもので、おそらく祖先の靈を祀る精神世界を表現したものと考えられている。国庫補助事業の調査区は、前者の調査区の間を掘ったものであるが、濠が2本南北につながる形で検出されている。またSD6とした遺構は旧河道ではないかと考えられ、断面観察では自然流路に人工的な手を加え濠と同じような機能をもたせたことも考えられる。遺物は弥生中期から後期の土器とともに、人骨と思われる骨も出土している。

これまでの調査で台地西側にはほぼ全体に2本～3本の濠が巡ることが確認され、旧河道も流れていたことがわかり、無文土器や三轉系土器など朝鮮半島系の土器もまんべんなく出土することが判明した。

墓地の調査は昭和19年に調査された地点の末堀部分について実施され、壇棺、石棺の出土例や副葬品から新たな知見が加えられることになったが、それについては石田町の報告書の刊行に期待したい。今回の確認調査の成果は、何よりも昨年から続けた墓域の範囲が拡がり、中期から後期にかけての小児壇棺を主体とする墓域であることと、小さな谷を挟んだ萱ノ木城出土の5号壇棺から、本遺跡初めての青銅製鉗の副葬が認められたことであり、小児壇棺墓の再検討をする必要があると思われるが、次回の調査にゆだねたいと考えている。



調査区全体写真（航空写真）



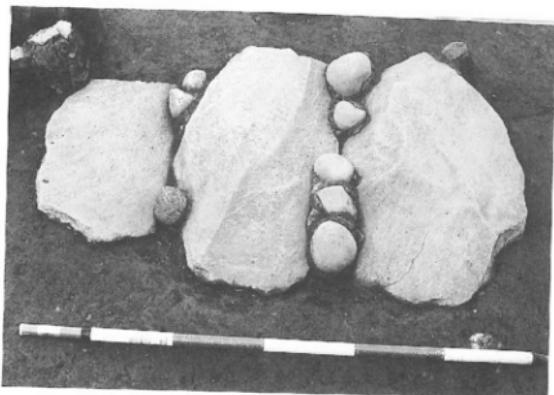
調査区近景



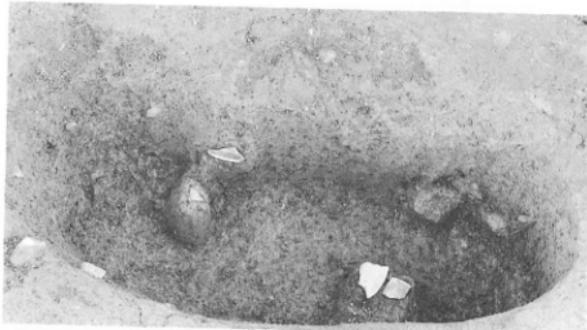
菅ノ木13-2区南東側土層



菅ノ木13-1区調査区全景



萱ノ木13-1区1号石蓋土壙墓検出状況（上面）



萱ノ木13-1区1号石蓋土壙墓検出状況（下面）



萱ノ木13-1区1号（右）・2号（中）・3号（左）小甕甌検出状況



菅ノ木13-1区4号（左）小児葬棺墓検出状況



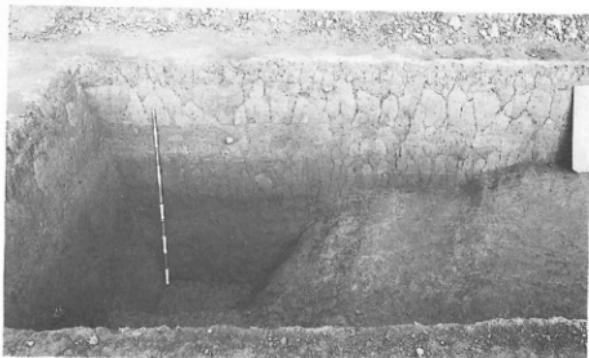
菅ノ木13-1区5号小児葬棺墓検出状況（上面）



菅ノ木13-1区銅鉢出土状況（下面）



調査区近景（原ノ久保13-1区）



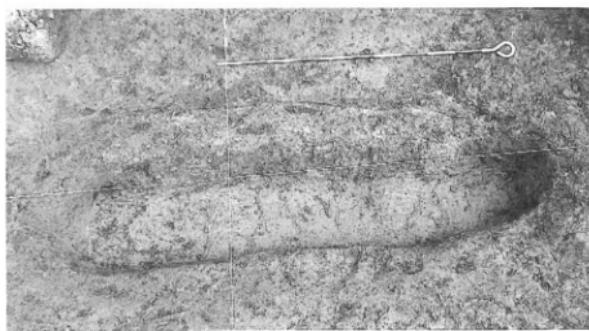
原ノ久保13-1区南側土層



原ノ久保13-1区南側土層



原ノ久保13-1区1号石蓋土槨墓検出状況（上面）



原ノ久保13-1区1号石蓋土槨墓検出状況（下面）



原ノ久保13-1区1号小児瓮棺墓検出状況



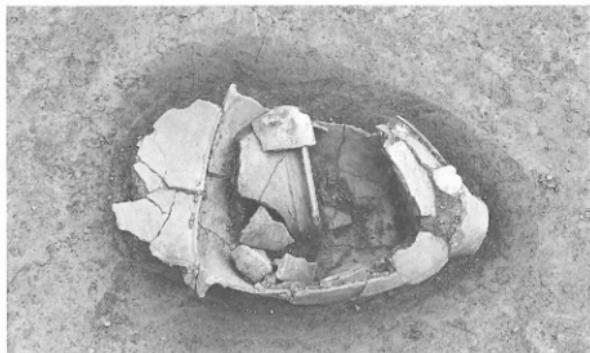
原ノ久保13-1区2号(手前)・3号(中)・4号(奥)小児甕棺墓検出状況



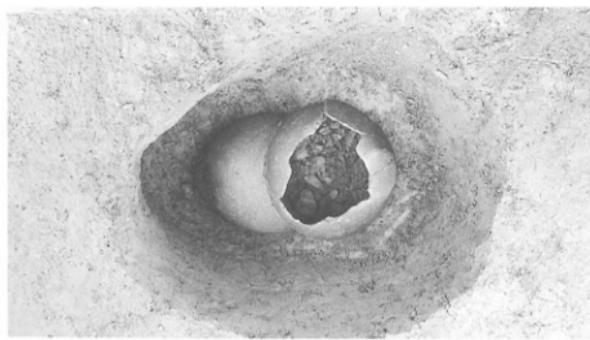
原ノ久保13-1区4号小児甕棺墓検出状況



原ノ久保13—1区6号小兜壳棺墓検出状況



原ノ久保13—1区8号小兜壳棺墓検出状況



原ノ久保13—1区9号小兜壳棺墓検出状況

## 報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき						
書名	原の辻遺跡						
副書名	原の辻遺跡発掘調査事務に係わる範囲確認調査報告書						
番次	IV						
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書						
シリーズ番号	第25集						
編著者名	安楽勉・藤村誠・小玉友裕・中尾篤志						
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所						
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴龟触1092番地1 TEL09204(5)4080						
発行年月日	西暦2002年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
原の辻遺跡	長崎県壱岐郡 芦辺町・石田町	42423 42424	73°10' 72°92'	37°45'30" 37°45'30"	20011010 /	1,329m <sup>2</sup>	原の辻遺跡発掘調査事業 (国庫補助事業)
取締遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
原の辻遺跡	集落 墓地	弥生時代 古墳時代	濠・溝 甕棺墓 箱式石棺墓 石蓋土塙墓	弥生土器 打製・磨製石器 削鐵・ガラス小玉 銅鏡			

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第25集

## 原の辻遺跡

2002. 3. 31

発行 長崎県教育委員会  
長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂